

信行検定 テキスト

宗務本庁 教育局

目 次

1. お看経編	-4-
①口唱	-4-
②朝夕のお看経	-7-
③言上	-9-
④妙講一座	-11-
⑤拍子木・木琴	-16-
⑥法鼓	-18-
⑦おりん	-19-
⑧お数珠	-22-
2. お給仕編	-23-
①お給仕全般	-23-
②お灯り	-26-
③お花	-27-
④お初水・お仏飯	-29-
⑤お掃除	-31-
⑥お道具	-33-
3. 化他編	-37-
①将引	-37-
②連れ参詣	-39-
③転教	-40-
④回向	-42-
⑤助行	-44-
⑥ご奉公	-48-
4. 三祖について	-49-
①三祖聖人	-49-
②高祖日蓮大士	-51-
③門祖日隆聖人	-55-
④開導日扇聖人	-60-
5. 参詣編	-64-
①御講	-64-
②寒参詣・夏期参詣	-71-

③行事	-72-
④御法門聴聞	-73-
⑤お供水	-75-
⑥挨拶・礼儀	-77-
6. 本門佛立宗について	-79-
①宗名	-79-
②寺院名山号	-81-
③御会式	-84-
④宗風	-85-

お看経編

①口唱

目標

「良い御看経」ができるようになる。

概要

「良い御看経」とは、御本尊をみつめ、御弘通を第一に祈り、一遍でも多く、姿勢を正し、大きな声ではっきりと本門八品所顕上行所伝の南無妙法蓮華経をお唱えすること。この実践ができる信者になることを目指す。

口唱に関する御教歌

『怠らずつとむる口唱其しるし かならずことにふれてあらはる』

『おそろしく貴ふときものか 妙法の口唱の力めにみゆるなり』

『御題目口唱の功德人とはゞ 所願成就するとこたへよ』

『おのが身の為の口唱の万遍は 法のこゝろに叶はざりけり』

『御弘通を第一として口唱せば 現世の願も成就やせん』

『口唱にはちゑ才覚も無益也 うたがひなきを信心といふ』

『唱ふるが信心なればとなへずに ありがたがるは信心でなし』

『罪滅の法は口唱の外になし 怠るときはおのがあやまり』

『施餓鬼して経よまんより法界の 回向に口唱するぞめでたし』

『だいもくは千遍よりは万遍と 唱へかさねて妙をしる也』

『ねがひなき人しなければ法華経に まかせて口唱するぞ肝心』

『むつかしき事をせよとは無理なれど しやすき口唱せぬはわうちやく』

ポイント

- ・本門佛立宗が拠り所とする根本経典は釈尊が最後に説かれ、みずから「これこそ第一の教えである」と宣言された『妙法蓮華経』（略称・法華経）です。その法華経に説かれる、南無妙法蓮華経の御題目を口にお唱えすることを本門佛立宗の根本の修行としている。

御題目を口に出してお唱えすることを「口唱」または「御看経」という。また、当宗は

別名を「口唱宗」（門祖聖人『十三問答抄』）という。

- ・「良い御看経」を事相（姿形）に表わす。
- ・御祈願をあげて精一杯口唱に励み、御利益で更に信心増進する。

御教歌「願ふことなしと思へばおこたりぬ ありとおもへばすゝむ信行」

- ・ご弘通を第一に祈り、口唱に励む。

いつまでも自分の御祈願ばかりしてはいけない。みんなの幸せを願い、このご信心を人にもお勧めし、お助けするご弘通の御奉公をすることが最も功德が積み、その功德でもって自らの願いや日々のご守護を感得できると心得、御弘通の思いを持って口唱に励むことが大切。

- ・本門佛立宗のお唱えしている御題目は、「本門八品所顯上行所伝の南無妙法蓮華経」である。「本門八品所顯上行所伝」ということが非常に大切で、ここが変わってしまうと、全くの別物になってしまう。南無妙法蓮華経と一口にいても、違い目があることを心得ておく。
- ・本門佛立宗は身業（身体でする行い）、口業（口でする行い）、意業（心でする行い）の中で最も大事とするのが口業です。当宗は口業正意としっかりと心得、御題目口唱に励むことが大切。

御指南

『ただ有難しとは。おもふと。いへども。口唱せざれば。感應を蒙る道なし。笛あれども。吹かざれば。声を出さず。鐘あれども。つかざれば鳴らず。心にのみ。思ふとも。こと葉に出さざれば。人に通ぜず。身口意。三業の中。末代名字の信行。如説修行と申すは。口業第一の肝心。正意の行なり。若口唱なくは。一切衆生を助くる弘通の道絶ぬべし』（扇全4巻178頁）

- ・御題目口唱によって、罪障が消滅し、功德が積めることを知る。

口唱の功德5つ。①罪障消滅②諸願成就③亡き衆生の回向④ご弘通⑤報恩菩薩行

『口唱の心得

故にもし信の起こりたる御人なれば、御題目を唱ふるに心におもひよろこぶ心得あり。第一に今我唱へ奉れる御題目は我聲にあらず、即ち佛の御聲なれば御經なればと思ひ、唱ふることわが過去よりの罪障消滅する音聲なりと悦ぶべし

第二に此御題目は諸佛諸天の歎びきかせ給ふ御題目なれば、われら此御經を持つを大事と守りて願成就せしめ給ふを悦ぶべし。

第三に此音聲法界に行わたりて、一切の亡霊みな苦をのがれ樂を得る大功德ありと悦ぶべし。

第四に一切衆生に佛性を一時によび顯す功德あれば、此功德によりて自然に御法も弘ま

り行と悦ぶべし。

第五に此大法にあひたる我身を返す返すも悦びて、行住坐臥に佛祖の御恩を忘れざれば、此人眞實の佛の御子菩薩行なり。

あらまし五つ如是。唱へテムダニナル事ナシ、身付ノ功德ヲツトムベキガカシコキ人也』（扇全5巻54頁）

例 題

○良いお看経とは具体的にどういうことですか？

○口唱とは何を口に唱えることを言いますか？

○口唱に関する御教歌を1首あげてください。

※これより各項目毎に例題を設けてあります。それぞれの内容によってはテキストに載っていないものもあります。適時、勉強会などでご指導のほどお願い致します。

②朝夕のお看経

目標

朝夕のお看経の意味を知り、毎朝毎夕のお看経のできる信者になる。

概要

佛立信者は、この世の無常、明日をも知れぬ我が身であることを弁えて、生きることが大事と教えていただいています。

佛立信者の一生はこの一日にあり、一日の一呼吸の一刹那にありと思つて、一生を1日に考え、朝目が覚めた時を生まれた時、夜寝につく時を一生の終わりと考えて、世間の上でも、ご信心の上でも後悔のないようにせねばなりません。朝のお看経は我が人生の事始めであり、朝一番の自分の大切な時間、身体を御宝前に使わせていただくことで、その日1日は、お計らいで平穩無事に過ごさせていただけるのです。

また夕看経は、夕は一生の終わりと考えて、今日までの一生を平穩に功德が積めたと喜び、報恩感謝のお看経をあげさせていただくことで、さらに功德が積めて、またお計らいがいただけるのです。

ポイント

- ・朝の御宝前へのご挨拶は、顔を洗って着替えてからさせていただく。朝のご挨拶は佛立信者の1日の始まりなので、身なりを整え、きちんと座ってご挨拶をさせていただく
- ・朝夕のお看経の意味を学び、御教務にチェックしてもらいながら、実際に朝夕のお看経が少しでもあがるように工夫する。その中から朝夕のお看経の本当の有難さを肌身で感得し、自ら進んで朝夕のお看経に励める信者を目指す。

お看経に関する御教歌

『朝夕のつとめは家のいのりなり いそがしくてもこれはやめるな』

『わするなよあしたゆうべのおかんきを 人の為にもおのがためにも』

『怠りの朝夕口唱すくなくば 信心するは無益なりけり』

『をこたりのむくひのなくば朝夕に 口唱するのも無益也けり』

例題

○朝夕のお看経が上がっているか確認ください。

(行の面でのチェックとして)

○どのくらいの時間させてもらっているかを確認ください。

○朝のお看経をさせていただく時に注意しなければならないことを述べてください。

○お看経についての御教歌を1首あげてください。

③言上

目標

言上文の意味を理解して、正確に言上できるようになる。
お助行の導師役を勤められるようになる。

概要

言上とは、

- ①佛、菩薩、諸天のお出ましを願う。（勸請）
- ②信者としての願いを御宝前に届ける。（祈願）
- ③亡くなった方々に御題目の功德を届ける（回向）

ポイント

- ・言上文を拝見して、正確に言上できる。
- ・お助行の導師をさせていただくことができる。
- ・言上文を諳んじて、その時々のご祈願を踏まえて臨機応変に言上ができる。
- ・導師役として心得る事

開導聖人御指南

「いましめおくこと

回向文 又は言上 御経読誦等も、これ芸に非ざれば上手も無益也 ご法門とても同じ、されば口演とどこほりながらにも、信心尊重の一筋にて、よみあげだにすれば、聴衆も罪障を滅し、諸天も御感応あるもの也、他見他聞をはばかりて、上手にせんと思へば功德少し、又歌舞伎、芝居の役者の上手といふも、真実の心を起して其人となる故に 見物人も、うれしくもかなしくも、おもひ見るもの也、下手は真実の心にえならずつたなきは己心也。」（扇全2巻450頁）

- ・参詣者として心得る事

導師役が言上中は、静かに言上を聞くこと。

導師役が参詣者を代表して、御宝前に言上しているということを心得ておく。

言上で述べられる意と、我が心が相応しているか確認する。

- ・言上ばかりに気をとられて時間を費やし、口唱が減ってしまつては本末転倒となる。

開導聖人御指南

「右 勸請回向文等。かくものしつれど。これにましても。はぶきても。そは信者のこゝろに。まかせよ。宗祖は要を好ませ給へば。所詮は但上行所伝の妙法五字を口唱

し奉るにあり」(妙講一座・扇全5巻266頁)

例題(お導師・お教務さんからの指導事項)

○お看経時の言上について

○言上についての指導

○導師役として心得 等

④妙講一座

目標

妙講一座を正確に大きな声でしっかりと言上が出来るようになる。

妙講一座によって本門佛立宗の宗義と佛立信者の持つべき人生観を知り、最終的にはその概略を心得た上で、御題目の尊さを人に伝えられようになる。

概要

妙講一座には本門佛立宗の大切な宗義や、佛立信者の人生観の全てが示されている。妙講一座を学ぶということは、そのお心を感得するということである。

御指南

「右勸請、回向文等、かくものしつれども、これに、ましてははぶきても、そは信者のこゝろにまかせよ。宗祖は要を好ませ給へば、所詮は但上行所伝の妙法五字を口唱し奉るにあり」（扇全 5 巻 266 頁）

「清風、題目ヲ讚歎シテ、上行要付ノ文證ヲ訓讚シ、汝ガ妙講一座ニ、出シタル要文ハ、口唱即持戒ノ行者ノ心得、用心等ヲ、教ヘタル也」（扇全 10 巻 254 頁）

※妙講一座の現代語訳については、佛立研究所のホームページ「本門佛立宗の教え・修行《妙講一座》」（<http://www.buddhology.jp/honmon/myoukou.html>）

に掲載の「現代語訳付き 妙講一座」をご参照ください。

ポイント

- ・テキスト（御法門用語辞典「五懺」165～166頁、「妙講一座」378～380頁、妙講一座現代語訳対照）を参考に、妙講一座の構成を把握する。
- ・妙講一座を制定されたのは開導聖人であること、また明治11年6月に制定されたその時期や背景を学ばせていただく。
- ・妙講一座には御題目口唱をさせていただくための心身を整えるものであると理解した上で、正しく言上させていただく。暗唱するより、ご文を拝見しながら言上するよう心がける。
- ・いくら自分が言上できるからと言っても、一人だけ早口で一座の法要を乱すようではいけない。導師に従い、皆が声を合わせて言上できるように配慮することが大切。

・あくまで修行の中心は御題目口唱である。妙講一座を言上する時間より口唱の時間が少ないようでは意味がない。お看経の時間にもよるし、普段全段拝読することは少ないが、お看経が主だということは覚えておくことが大切。

・妙講一座には此経難持（見宝塔品第十一）や神力品（如来神力品第二十一）、日月の御文（如来神力品第二十一）のような法華経のお経文や、如来滅後などお祖師様の御妙判が出典のものもある。

妙講一座のご草案はご開講当初からあり、当宗の歴史、宗義、法要の荘厳の上から等、あらゆる点を考慮され、時間をかけられ作成された。ご開講21年目に妙講一座をご制定され、高祖600回御遠忌に向けて講内の改良を図ろうされた。（御法門用語辞典「五懺」165～166頁、「妙講一座」378～380頁）

・妙講一座ご制定後、約10年を経て20年8月頃から開導聖人のご教導によって、お祖師様ご著述の『如説修行抄』も拝読されるようになった。その理由としては、当抄の別名を不離身抄（隨身不離抄）と称しており、末尾に「この書、御身を離たず常に御覧あるべく候」とお祖師様がわざわざ、念を押されていることに基づいている。

・『如来滅後五五百歳始観心本尊抄』（略称・本尊抄）はお祖師様のお書きもので、文永10年の佐渡・一ノ谷（さわ）にてご作成。末法における御本尊を顕すため。

『如説修行抄』（略称・修行抄）もお祖師様のお書きもので、同じく文永10年のご作成。折伏という信心修行の方軌（ありかた）についてお示し。

また、信心ということについてお認めになられた『四信五品抄』（略称・四五抄。建治3年ご作成）をあわせて、「三部の如説抄」、「当家の三大部」という。

・妙講一座が御題目口唱、弘通広宣のための法要式であることを心得る。神力品のようにお経文も入っているが、それすら御題目の功德を讃えるために拝読するものであることを知る。

・妙講一座の構成を把握する。そして御文の順番や意味には五悔の意が込められていることを知る。（五悔：懺悔、勸請、回向、随喜、発願）

無始已来 五悔：懺悔

如来滅後 五悔：勸請

南無久遠本地 五悔：勸請

南無当門 五悔：勸請

願くは受持 五悔：回向

あゝ有難や 五悔：随喜

願くは生々世々 五悔：発願

●参考資料 宗徒教範より

【無始已来〈総懺悔文〉】

(本文)

無始已来、謗法罪障消滅、今身より仏身に至るまで、持ち奉る本門の本尊、本門の戒壇、本門事行八品所顕上行所伝、本因下種の南無妙法蓮華經

この御文は前に述べましたように、五悔の中の「懺悔」のころを表わされた御文であります。また、総懺悔文ともいいまして、この御文には五悔全部のころが含まれています。それはどのように含まれているかといいますと、とりようによってはいろいろにとれますが、ひとまず、次のように当てはめることが出来ると思います。

「無始已来謗法罪障消滅」—懺悔。

「今身より仏身に至るまで持ち奉る」—発願・回向・随喜。

「本門の本尊…本因下種の南無妙法蓮華經」—勧請。

であります。2番目の「今身より仏身に至るまで持ち奉る」という御文を発願・回向・随喜の3つに当てましたことは、誓いの心を表わしたものでありますから発願であることは当然であります。同時に「持ち奉る」という言葉は大法受持を言いあらわしたのですが、大法受持を修行の上で表わせば、我れも唱え人にも勧める菩薩行でありますから回向。更に受持とは、随喜の意がなくてはなりませんから随喜、と、こういうように拝察させて頂けば、三つのものが含まれてあると見て、無理でないと思うのであります。簡単な説明で了解しにくいと思いますが、とにかく、無始已来の御文には総じて五悔の意が含まれている、と心得て頂きたいのであります。

さてこの御文のあらましを申しますと、〈いつとも数えることの出来ない遠い昔から御法のみ教えに従わず、積み重ねて来ました罪によって成仏の妨げとなっている過ちをおゆるし下さい。こんにち計らずも御法にお出値いささせて頂きましたからには、仏果を成就させて頂きますまで、誓って御本尊を護持し、御法の教えを頂き、御題目口唱のご信心に精進させて頂きます。本門八品所顕上行所伝本因下種の南無妙法蓮華經〉と、いうわけになります。

【如来滅後〈勧請文〉】

(本文)

如来滅後、後五百歳始、観心本尊抄に曰く、今本時の娑婆世界は三災を離れ、四劫を出たる常住の浄土也、仏既に過去にも滅せず、未来にも生ぜず所化以て同体、是即ち己心の三千具足三種世間なり、迹門十四品に、いまだこれを説給ず、法華經のうちに於ても時機未熟

の故か此本門の肝心南無妙法蓮華經の五字においては、仏猶文殊薬王等に、これを付嘱し給はず、いかに況や其已下をや、但地涌千界を召して八品を説てこれを付嘱し給ふ、其本尊の体たらく本地の娑婆の上に宝塔空に居し塔中の妙法蓮華經の左右には、釈迦牟尼仏、多宝仏、釈尊の脇士は、上行等の四菩薩、文殊弥勒等は、四菩薩の眷属として末座に居し、迹化他方の大小の諸菩薩は、万民の大地に処して、雲閣月卿を見るが如し、十方の諸仏大地の上に処するは、迹仏迹土を表するが故也、かくのごときの本尊は、在世四十余年にこれなし、八年の間にも、但八品に限る。本朝沙門 日蓮撰 大慈大悲大恩報謝、南無妙法蓮華經

本尊抄は、末代法華經の行者の御本尊を顕し示されたもの。如説修行抄は、行者の修行の仕方を示されたもの。四信五品抄は、行者の心の置き方、信者の位を定められたものであります。三つの御書の心をいいますと、こんにち、高祖日蓮大士の教えを頂きますものは、八品所顕上行所伝の御題目を御本尊と頂き(本尊抄)、妙法口唱教化折伏のご奉公に励み(修行抄)、自分はいつも初心無智のもの、御題目のみがご信心の中心と心得る(四五抄)ということであります。

さて当文は、本尊抄の中のいわば中心ともいえる御文を抜き出してお示しになったものであります。お祖師様がわれわれお互いにお授けになろうとせられた大切な御本尊のことでもありますので、これを直接、お祖師様の御文のままをお示しになったのであります。そのお意は、“いま、わたし(開導聖人)が示す御本尊は、決して自分独りの考えから出たものではないぞ、”という点にあると思います。お互い当宗のご信者として妙講一座を拝読させて頂く度に当宗の御本尊はお祖師様の仰せられたように、一点の誤りのない結構な御本尊である、と、いよいよ御本尊に対するご信心を固めることが大切であります。

〈お祖師様が観心本尊抄にお示しになってあるところによれば、妙法御題目は久遠本仏のお悟りそのままであり、これを事の一念三千といい、世の中の一切の根本の道理であります。この久遠本仏の御悟り・一念三千の法理は、一代仏教の中では法華經、その法華經の中でも本門法華經の中に説き顕され、これを妙法五字の御題目の中に包みこまれて、本化上行菩薩にご付嘱(授与)になったのであります。久遠本仏が本化上行菩薩にお手渡し遊ばされる次第を説き明かされたものが、法華經本門八品の教えであります。

さて妙法五字の御本尊の功德を顕し出せば、その中には諸仏諸菩薩の御功德を含み、宇宙自然法界の一切の功德を摂めているのであります。故に、妙法五字の御本尊の顕われ給う処、これ寂光浄土であります。このような立派な御本尊は一代経々いずれのところにも説き示されておらない、ただ、法華經本門八品に顕わすところのものであります〉というわけです。

【神訓(日月の御文)】

(本文)

日月の光明の能くもろもろの幽冥を除くが如く、斯人世間に行じて、よく衆生の闇を滅し、無量の菩薩をして、畢竟じて一乗に住せしめん

日月の御文は如来神力品の結びの御文で、本門の大法をお弘め遊ばされたお祖師様の御徳を讃歎し、更にこの大法を頂いて信心修行する人の功德を表わされたものであります。

この御文は、まず本門の肝心妙法五字の御題目を頂いて、滅後のご弘通の総導師である上行後身高祖大士の御徳を讃歎し奉るのであります。御文のわけは

〈太陽や月の光が下界を照らして一切の暗黒を除くように、法華經本門の肝心妙法五字の功德は、一切衆生の心の闇を照らし、煩惱を除く。ここに本化上行菩薩は、久遠本仏よりこの妙法五字の御題目を授けられ、仏勅によって滅後末法に御出現になり、御法の御功德を名乗りとして、日蓮と称し末法悪世の凡夫の心の闇を除くために、法華經本門の大法を勧め、ご弘通されたのである〉 というわけです。

例 題

- 妙講一座を制定されたのはどなたですか？
- みょうこういちざを漢字で描いてください。
- 五悔を順に述べてください（懺悔～・・・）

⑤拍子木・木琴

目標

先頭に立って木琴・拍子木を打てるようになる。

概要

拍子木は、お看経の拍子・リズムをとる道具である。御導師の打たれる木琴に併せて打ったり、拍子木を中心にお看経の速度を調整する。御題目をお唱えしながら正しい姿勢で正しく持ち、規則正しく打てるよう練習する。

拍子木、木琴に関する御教歌

『法王の御味方なれやいさましく ^{かちどき}勝鯨声あぐる 太鼓拍子木』

『余念なくなるも太鼓の音のみか ストントンとんの拍子木もよし』

御指南

『此二点ヲイマシムルノミ。拍子ハヅレ、調子ハヅレヲ嫌フ事。近隣ノ妨害ヲツトシムベキ事』（扇全 13 巻 52 頁）

ポイント

- ・左手を体の中心におき、その手のひらに拍子木をのせ、落ちないように指で押さえる。右手で拍子木の端を握り、軽く良い音が出るように左手の拍子木に打ち合わせる。大きすぎたり小さすぎてもいけない。
姿勢は脇を絞めて肘は90度に曲げ、左手はなるべく動かないように心掛ける。上にあげすぎたり、前に突き出したり、下すぎたり膝の上で打つのはいけない。
- ・御題目を唱えながら正しいリズムで打てる。
必ず御題目を声に出しながら打ち合わせる。御題目一遍に対して拍子木は同じ調子で『南無 妙法蓮華経』と6回打つ。（早すぎたり遅すぎたりしないよう注意）
- ・導師に合わせて上手に打てる。
導師の木琴に合わせて打つ。お看経が早くあがるよう、周りの音、声をよく聞きそれに合わせて打つ。
- ・日月偈、南無久遠、如説修行抄など、妙講一座を見ながら枠の通りに打てるよう十分練習をする。
- ・導師に合わせて打ち出し打ち終わりができる

見ることも大切。導師の木琴に合わせてたり、ガンを打つタイミングを見逃さないよう打ち出しと打ち終わりも練習する。

- ・導師の木琴、他の人の拍子木、口唱の声に合わせて打つことができ、一人でも30分以上継続して打てるようになることが大事。

例 題

**拍子木・木琴・法鼓・おりんは実践事項の為
お導師・お教務さんからの指導・目視・確認ください。**

○拍子木を打ったことがありますか？

○お導師に合わせて拍子木を打てますか？

○ガンに合わせて打ち始め・打ち終わりができますか？

○御講の拍子木を打てますか？

⑥法鼓

目標

導師の木琴や拍子木に合わせて、クセのないよう正しく打てるようになる。

概要

法鼓は拍子木と同様にお看経のリズムを整え、気持ちよく御題目をお唱えできるようにする為の道具。（現場のお講師にチェックしていただく）

法鼓に関する御教歌

『法王の 御味方なれや いさましく 勝^{かちどき}鯨声あぐる 太鼓拍子木』

『余念なく なるも太鼓の 音のみか ストントンとんの 拍子木もよし』

御指南

『題目太鼓 口唱弄引』（扇全 13 巻 52 頁）

『太鼓三挺、拍子木十挺、御題目の梵音聳つぶれたり。さわかしきが信心と思ふべからず。又法躰の折伏殊勝なるが宜し。』（扇全 13 巻 263 頁）

ポイント

- ・まずは譜面を見ないでも打てるようになること。
- ・音の強弱はお看経に合わせて強すぎず弱すぎずに、御題目の声が打ち消されてしまわないようその場の状況に合わせて考えて打てるように心がける。
- ・御題目口唱のときだけでなく、日月偈、南無久遠も打てるように練習をする。
- ・外に響く唱題もありがたいことだと、他の人に随喜を起こさしめるような心のこもったお看経の場となる為のものと心得る。
- ・七段がえしについては、寺院によって叩き方が多少異なります。教務師に確認して下さい。

仏立法鼓之譜

このふ)

七段がえし		又づし		五段がえし		打ちだし
左	右	左	右	左	右	
ゴ	ト	ト	ス	ト	ス	一
コ	ト	ク	ト	ク	ト	二
コ	ト	ク	ト	ク	ト	三
ク	ト	ク	ト	ク	ト	四
ク	ト	ク	ト	ク	ト	五
ク	ト	ク	ト	ク	ト	六
ク	ト	ク	ト	ク	ト	七
ク	ト	ク	ト	ク	ト	八
ク	ト	ク	ト	ク	ト	九
ク	ト	ク	ト	ク	ト	十
ク	ト	ク	ト	ク	ト	十一

漸次ツヨク叩ケド
繰返入可シ

●印は強く
●印は軽く
●印は可し

⑦おりん

目標

お看經の始まる前、御題目口唱を止めるとき、言上発声の前後、最後お看經を終えるときに打てるようになる。

概要

おりんは悪い心を消滅させ、良い心を生ぜしめるために鳴らすともいわれている。また法要の一座の節目に必ず鳴らすものです。良い音色を出せるよう練習する。打ち方はリン棒を軽く持ち、下からすりあげるように打つ。

ポイント

- ・磬・りんを鳴らすということは一座の法要、お看經の雰囲気をもより荘厳・厳肅にするためでもあるため、できるだけ良い音色で正しく打てるよう心がける。

ガンの一例（本山キン座より） ○印で打つ

妙講一座

(一) 無始已来、謗法罪障消滅、○今身より、・・・八品所顯○上行所伝本因下種の南○
經

(二) 如来滅後々五百歳始觀心本尊抄○曰 今本時の娑婆世界は、三災を離れ○四劫を出
でたる・・・

かくのごときの○本尊は、在世四十余年に、これなし、八年の間にも但○八品
に限る。・・・

(三) 南無久遠本時の嫡弟、二千余○回の当かみ虚空え上において○塔中直授の相承を蒙
り・・・

弘安五年壬午の十月十三日の夕にいたるまで、○我不愛身命・・・

大難四か度小難数を知らずの御弘通、大慈大悲大恩報謝。南○經

(四) 南無当門勸請の列祖、○日朗菩薩、日像菩薩・・・本門八品所顯○上行所伝本因下
種の・・・

(五) 願くは受持口唱し奉る○本地本法の功力を以て○法界群靈離苦得益仏果菩提・・・
講内祈願病者の面々、当病平癒病即消滅。一天四海、皆歸妙法、後五百歳中広宣流
布無令断絶

(六) あゝ有難や、まれに人身を得、○適仏法にあへり○然らずは○生涯衣食の獄・・・

(七) 願はくは・・・無辺の衆生を度して永く退転なからん事を、おもふものなり。
(八) 妙法蓮華經序品第一○方便品第二譬喩○品第三・・・普賢菩薩○勸発品第二十八・・・

(九) 爾時に仏上行等の○菩薩大衆に告給はく諸○仏の神力はかくのごとく・・・
法輪を転じ。諸仏此に於いて。○般涅槃し給ふ。爾時に世尊重ねて此義を宣べんと欲して○偈を説いて言く・・・仏の諸説の經の因縁及び次第を知て○義に随て実の如説かん。

(十) 日月の光明の能諸の○幽冥を除くが如く斯人世間に行じてよく○衆生の闇を滅し・・・

是故に智あらんもの此功德の利を聞き○て我滅度の後に於て斯經を受持すべし

(十一・十二は表記なし)

(十三) 南無久遠実成釈迦牟尼如来。証明法華。多宝仏塔。○十方分身。三世諸仏。○上行。無辺行。浄行・・・
乃至。三国光増益。護持妙法。利益衆生○天長地久国土安穩。・・・乃至。法界平等利益。

如説修行抄

第一段

夫 以 ○末法流布の時 生を此土に受て此經を信ぜん人は○如来の在世より・・・
經文を先として○猶多怨嫉況滅度後經滅度後と朝夕に教へしこと是也。予が或は処を逐れ。或は疵を被り。或は○兩度の御勘氣を蒙りて・・・

第二段

問 云 如説修行の行者は○現世安穩なるべし。何が故ぞ。三類の強敵盛ならんや。

答 云 ○釈尊は法華經の為に。今度九横の大難に値給ふ。・・・

敵は多勢なり法王の一人は無勢なり。今に至て軍やむ事なし。○法華折伏破権門理の金言なれば・・・

妙法独繁盛せん時。万民一同に南無○妙法蓮華經と唱へ奉らば・・・

第三段

問 云 如説修行の行者と申すは○何様に信ずるを申すべきや・・・

無二亦無三。徐仏方便説。正直捨方便。乃至。不受余經一偈と禁め給へり。○是より已後は。唯一仏乗の妙法のみ。・・・

若人不信毀謗此經即断一切世間仏種。乃至。其人命終。入阿鼻獄とさだめ給へり。○此等のおきての明鏡を本として・・・

第四段

難じて云。○左様に方便権教たる。諸經諸仏を信ずるを○法華經といはばこそ・・・
二門の中には○法華折伏と申す也。天台の云。法華折伏。破權門理。まことに故ある
哉・・・

第五段

されば末法今の時は。○法華經折伏の修行をば誰か經文の如く行じ給ふ。○誰人にて坐
すとも・・・

第六段

哀なる哉。○今日本国の万民。日蓮並に弟子旦那等が三類の強敵に責られ。○大苦に値
ふを見て悦で・・・

手を取。肩に引懸て○靈山へ走り給はゞ。二聖二天十羅刹女は受持の者を擁護し・・・

⑧お数珠

目標

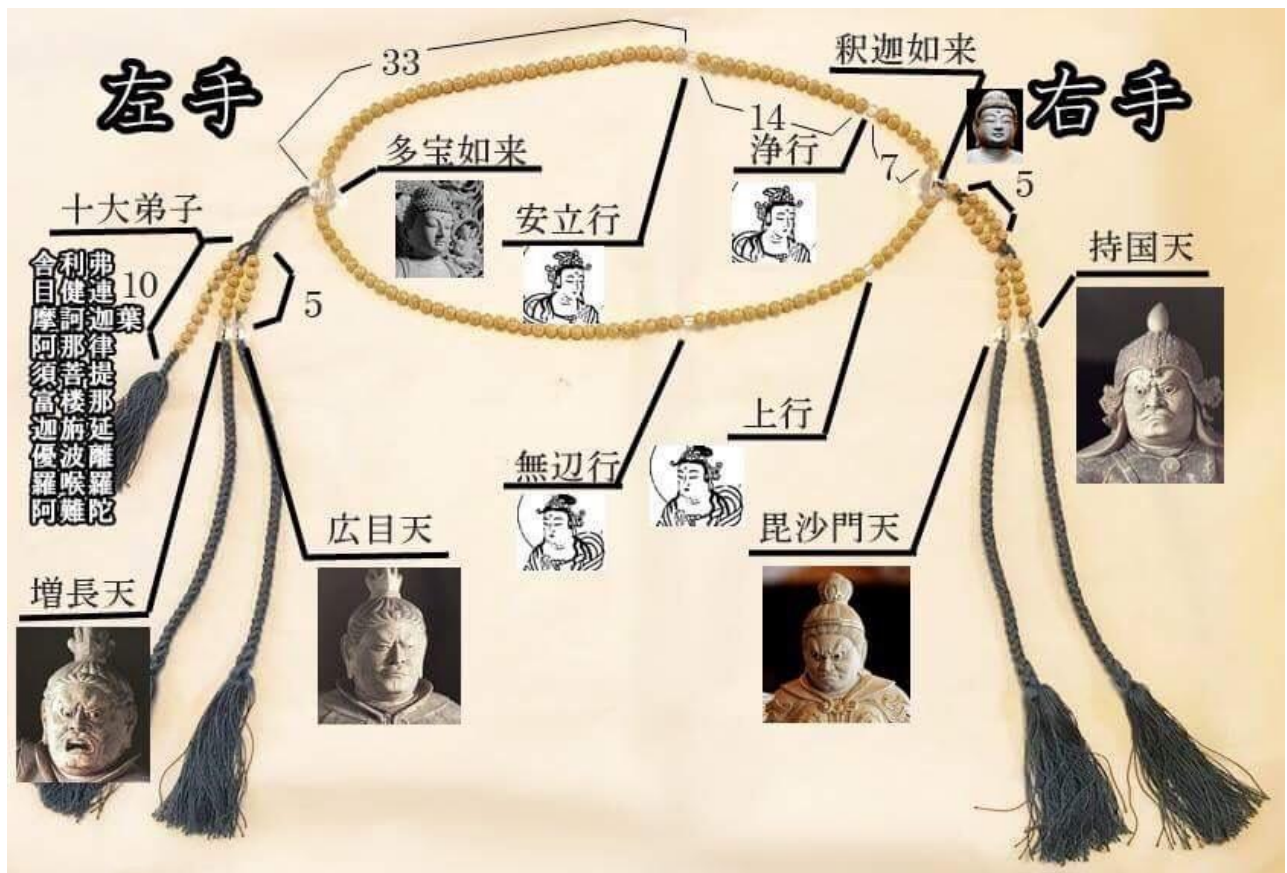
お数珠もご信心も立派になるよう心がけ、お数珠の意味を知り床の上に直に置くなど粗末に扱わないことを覚える。

概要

お数珠は古来より仏・菩薩を礼拝する時の仏具の一つです。また常にご信心を忘れないため、佛立信者としての自覚を高める為にお持ちする大事な仏具です。

ポイント

- ・佛立宗のお数珠は、開導聖人が他宗の数珠と区別しやすいようにと考案されたものです。主に2個の大きな珠と108個プラス4個の112個の子珠で構成されています。子珠の中に色の違う4つの珠は四菩薩でそれ以外の108個の珠は私たちの百八煩惱を表しています。



お給仕編

①お給仕全般

目的

お給仕の心得を身につける。

概要

お給仕はまずは姿、形から入ることが大切です。

御題目の御本尊は生きておられる仏さまですが、信心が至らない間は文字としか見えないものです。

そこで生きておられる仏様と感得できるように、お敬いの気持ちを持てるようにと自らの心を磨くのがお給仕です。

お給仕には御宝前に対する「法給仕」、お教務、ご信者に対する「人給仕」があります。また、冥の照覧といって、私たちには見えなくとも仏様は生きておられて、いつも私たちの行いをご覧になっています。

法給仕、人給仕を誠実に勤めていけば、ついに仏様は生きておられるということを感じていただけるのです。

お給仕に関する御教歌

『仏前の香華灯明ふき掃除 すればわが身の福德と成』

お給仕の実際 お給仕をさせていただく際の心得

- ① 御宝前は、生きてまします『み仏』であるということを常に忘れず、お給仕をさせていただくこと。
- ② 御宝前は常に清浄に、『毎日』お掃除をさせていただくこと。
- ③ お給仕をさせていただくときには、失礼にあたらぬ服装でさせていただくこと。(エプロンがけや、下着のまま、寝間着のまま等々)
- ④ お給仕の際は、必ず手を清め、フクメンをすること。
- ⑤ 御宝前の用具は必ず専用のものを用意し、自分達のものとは区別すること。

お給仕の心得

- ・ 御宝前へのお給仕は「させていただく」という思いが大切です。
- ・ 「掃除すればいいんだろう」「ものが上がっていいんだろう」などという、「やればいいんだろう、してやっているんだ」という心根ではいけません。

- ・御題目の声をお届けして日々の信心修行の対象となる御宝前が、たとえばホコリまみれであったり、お盛り物がなかつたり腐っていたり、お花が枯れていたりにしているようでは、「真心のこもったお給仕ご奉公をさせていただいている」とはいえませんが、そのような状態でいくら御題目口唱に励んだとしても、思いと行いがチグハグで、正しい信行の姿とはなりません。
- ・御宝前の御莊嚴を心がけるということは、お敬いの心で御法にお仕えしようという素直正直な心の表れですから、大切にさせていただかなくてはなりません。
- ・常に「御法さまにお喜びいただけるように」という思いで、毎日のお給仕ご奉公に励ませていただきますように。

ポイント

・三宝について

信心は深く三宝（さんぼう）を敬い、お給仕申し上げるところから始まります。

仏教を信仰していた聖徳太子は、日本で最初の憲法である十七条憲法の中で「篤く三宝を敬え。三宝は仏・法・僧なり」と制定していました。

三宝とは「仏宝（ぶつぼう）・法宝（ほつぼう）・僧宝（そうぼう）」の三つです。

仏宝とはみ仏、法宝とはみ仏の教え、いわゆる御題目。そして僧宝とは仏法を学び伝える仏弟子のことですが、教務そしてご法を弘める意味でご信者もこれにあたります。

お互いは、この三宝に対してお敬いの心持ってお給仕させていただくことで功德を積みご利益感得させていただけるのです。

・お給仕の心構えを学ばせていただく。

朗門の三則「給仕第一、信心第二、学問第三」

高祖大士の高弟「六老僧」のお一人である日朗上人の流れを汲む者が守るべき信行の心得。理屈から入るだけでなく「姿かたちに表す」お給仕から入ることでお敬いの心が培われる。

・お給仕の種類

人給仕…御導師やお講師にお給仕させていただくこと。

法給仕…御宝前にお給仕させていただくこと。

・御尊像のお綿かけお給仕について

御尊像にお綿をおかけする由来は、お祖師様のご弘通が飛躍的に拡大していることを嫉み、小松原において地頭の東条景信がお祖師様を殺害せんとするご法難「小松原のご法難」（文永元年11月11日）により、眉間に刀疵を負われました。

晩年、この疵あとが元で冬になると疵が疼かれたのを、お綿で手当てされた故事に因んで、

寒くなる11月頃に生きてまします御尊像にお綿をおかけし、暖かくなる4月頃にお綿外しをさせていただきます。実際のお給仕の時期や仕方については各寺院の御講師からのご指導に従ってください。

・手の洗淨

お給仕前には手を洗ってからご奉公させていただきます。

・マスクをつける意味を知っている。

息がかからないようにという敬いの気持ちを示すために、御宝前のお給仕をする時はフクメンをつける。

・御宝前に対して身なりを整えてお給仕をする。

寝間着姿や、極端に肌の露出した服装は控え、清潔な格好をする。大切なお客が訪ねてこられるときに、真夏だからといって下着のような服装で応接はしないのと同じ。

・切火の意味を知っている。

浄めの意味として、切火をさせていただきます。

お供え物、お掃除する道具などは事前に切火をして浄めてから使用する。

すべてお給仕が終われば、私たち凡夫が御宝前を穢したということで、御宝前の周りに切火をする。

例 題

①のお給仕全般から⑥のお道具までは実践事項の為

特にお導師・お教務さんの指導・目視・確認ください。

○お給仕の際の心構えを述べなさい

○お給仕には二つあります。空欄を埋めてください

A, ○○給仕 B. ○○給仕

○朗門の三則の三つを述べなさい

○お給仕の手順を確認ください

○御戒壇のお掃除が出来ているかを確認ください

②お灯り

目標

御宝前のお灯りをつけられるようになる。

概要

法要を勤めるときには御宝前に灯明とお線香をお供えする。適切な作法を身につける。

ポイント

- ・専用の道具(マッチ、ライター)を使うことを知っている。
御宝前用のろうソクとお線香を使うことを知っている(他のものには使わない)。お給仕するときに使う道具類は御宝前専用のものを準備するようにしましょう。普段、自分たちが使っているものを御宝前に対して使ってはいけません。
- ・灯籠やろうソクをつけることでお灯りのご供養となり、お線香は香のご供養となります。
- ・お線香は香りのよい物を選び、1本香炉の真ん中に立てる。

例題

○お線香の立てる位置は？

- A, 立てられる場所であればどこでも良い
- B, 真ん中に真っ直ぐに立てる
- C, 斜めになっても真ん中であれば良い

○ろうソクはアロマキャンドルでも良い

- A, はい B, いいえ

○お灯りを点ける際の作法を確認ください

③お花

目標

御宝前にお花をお供えできるようになる。

概要

御宝前を清浄にたもち、荘厳させていただくのがご信者の務め。お花を供える作法を身につける。

お花

- ・お花は「仏の命」の象徴。御宝前にお供えするお花は、分相応に、新鮮で常に生き生きしたお花をお上げる。(造花や鉢植え、又は家で飾ってあったお花は絶対に上げてはいけない)
- ・枯れてしまったり折れてしまったものは速やかに取り除く。『枯れたり折れてるものは×』
- ・花器の大きさに見合ったお花の量を活ける。『少なすぎるのは×』
- ・いくら立派なお花でも、立派すぎて御本尊御尊像が隠れてしまっはいけない。『御本尊御尊像を隠してしまうのは×』

ポイント

- ・専用の花器を使うことを知っている。
普段、自分たちが使っているものを使うのではなく、御宝前に供える専用の花器を用意する。
- ・花の正面を外陣に向けることを知っている(御宝前の荘厳のため)。
花には向きがある。花の正面を御宝前の方へ向けるのではなく、私たちの側から見える方へ向ける。お花には御宝前を飾るという意味もあるので、御宝前が立派に綺麗に見えるようにお花を私たちの方へ向ける。
- ・棘のあるもの、毒のあるものを供えないことを知っている。※棘のあるものは棘を取ればよい。
- ・生花を供えることを知っている(造花は供えない)。
御宝前には生花をお供えする。日々お花の様子を見て枯れないうちにお取替えする。取替えが面倒だからと造花を供えてはいけない。綺麗な生花をお供えさせていただこうという真心を御宝前はお受け取りになる。
- ・自分の部屋に一度、飾ったお花を御宝前にお供えしてはいけない。

御宝前のために買ったお花、または摘んだものをお供えする。

例 題

○御宝前に自分でお花をお供え・お取り替えができるかを確認ください。

○庭に咲いている花をお供えしても良い？

A, はい B, いいえ

○造花をお供えしても良いですか？

A. ①良い

②きれいなものであれば良い

③いけない

④お初水・お仏飯

目標

お初水の取り方、供え方、お仏飯の供え方を身につける。

概要

御宝前へは何ごともお初をお供えする心がけを持つことが大切です。お初水は朝一番、自分たちが飲む前の水のこと。私たちが生きるために欠かせない水をまず御宝前にお供えしようという真心をお受け取りになるのです。

お仏飯はご飯を炊いた時に自分たちが食べる前に仏器に盛ってお供えします。

お初水

- ・朝、洗顔を済ませたら、お初水をお供えする。専用の容器にその日一番最初のお水をお取りします。お天目を直に水道の蛇口に持って行ってお初水を取ってはいけません。
 - ・お天目専用の敷紙、またはお布巾を用意し、前日にお上げしたお天目をお下げして、お下げ用の器に移し替える。
 - ・空になったお天目を専用のお布巾でおみがきする。
 - ・朝お取りしたお初水をお天目に移し替える。
 - ・最後に切り火を打ち、御宝前のお掃除が終わったらお供えする。(打った際に砕けた石がお道具に飛び散らないように、打つ距離に注意する)
- ※お下げした前日のお初水は『お供水』ですから、必ず頂くようにする。(決して捨てたり、粗末にしないようにする)

お仏飯

- ・家でご飯を炊いたら、必ずお初を御宝前にお供えいたします。いつまでもお供えしたままにして、ご飯がカチカチにならないようにします。また、お下がりには捨てることのないよう、有難く頂きましょう。お仏飯を盛るしゃもじは専用のものを用意し、自分達のものとは区別します。御法さまにお供えするご飯ですから、おいしそうに、形良く、心を込めてさせていただきます。

ポイント

- ・「お初」の意味を知っている。
- 自分たちがいただく前のものを御宝前にお供えするという心がけを忘れないようにする。

- ・専用のしゃもじを使うことを知っている。

御宝前にお供えする容器、道具は御宝前専用のものを用意する。普段、自分たちが使っているものをお供えに用いてはいけない。

- ・「お初水」の取り方(専用の器にとってから)を知っている。

お初水を取るときは朝一番に、水道の水を暫く流してから、お初水を取る専用の容器に汲む。それからお供え用の蓋つきの容器にお初水を入れ、切火をして御宝前にお供えする。

- ・お供えをさげたあと、いただくことを知っている。

前日お供えしたお初水のお下がりとは別の容器に移してから、いただく。お供えしている容器に口をつけてはいけない。

例 題

○きちんとお初水を取れているか。

○お初をお取りしている専用の器を用意しているか。

○お仏飯専用のシャモジ等の用意。

以上を確認してください

⑤お掃除

目的

御宝前のお掃除ができるようになる。

概要

御宝前を清浄にたもち、荘厳にお飾りするのはご信者の務めです。真心を込めてお給仕させていただくことが、自らの信心増進に繋がります。

御戒壇のお掃除

- ・ 全てのお道具を一度お下げする。
- ・ 天（内陣）・地（外陣）のおはたきを用意し、切り火をする。内陣は、お天目をお供えするところから上。外陣は、お天目をお供えするところから下。
- ・ おはたきの用い方は、上から下、中心から外へとかける。
- ・ おはたきが終わったら、おみがきをする。この際お布巾も、おはたきと同様に専用の『天・地』を用意して切り火をする。
- ・ おはたき、おみがきが終わったら、お天目をお供えし、お道具を所定の位置にお戻しする。
- ・ 最後に御宝前全体に切り火をして終了。御礼の御看経をさせていただきます。

お香炉

- ・ 日頃から御宝前専用のピンセット等で、お灰を底からかき回し、空気と混ぜて柔らかくする。
- ・ お灰の中に古いお線香の燃えカスが残っていることがあるので、ピンセット等で取り除く。
- ・ 灰おさえで周りを形良く整え、少しおさえ、最後に香炉を布巾で研く。

ポイント

- ・ お掃除の手順がわかる。
切火、マスク、服装
おハタキしてから→おフキンをかける
掃除用品自体の洗浄、片付けの仕方など
- ・ お掃除に使う道具を用意できる。
御宝前専用のものを使用する。

- ・ お掃除の意味
汚れたから掃除するのではなく、御宝前への敬いの気持ちを表現するということから、毎日させていただくこと。
- ・ 周利槃特の例話、阿私仙人にお給仕する例話（法華経提婆達多品第十二。または「身延山御書」）。掃除、お給仕を通じて仏道を得た。

例 題

○ご宝前のお掃除用のおはたき・お布巾の用意

○お掃除の手順

以上を確認ください

○御宝前のお給仕の時、なぜフクメンを着けるのですか？

A. ①風邪予防

②息がかからないように

③正体を隠すため

⑥お道具

目的

御看経に使う資具、御宝前を荘厳する道具の名前を覚える。

概要

お道具の名前を覚えて使い方を知ることは、ご信心を学ぶうえで大切な一歩です。名前がわからなければ、ご指導を受けるときに何の事を指しているのか見当がつかず、困ります。少しずつでも覚えるようにすることが大事です。

御宝前・御戒壇

- ・ 御宝前・御戒壇

本門佛立宗では仏壇とはいわず、「御戒壇」もしくは「御宝前」という。

※ご自宅にあるお道具類を書き出してみましよう。不足があった場合、しっかりそろえてご自宅の御宝前を御荘厳させていただきましよう。

御宝前お道具の名称

- ・ 門祖日隆聖人御位牌
- ・ 佛立開導日扇聖人御位牌

※蓮・隆・扇三祖の正しいみ教えの流れを忘れないため。

- ・ 御宝前用お天目……お初水をお供えする容器。
- ・ お徳利……お酒をお供えする容器。
- ・ お仏飯器……お仏飯をお供えする容器
- ・ つり灯籠……御看経をするときに付ける灯籠。
- ・ 常夜灯……一日中、常に灯しておくお灯籠。
- ・ 花器……お花をお供えする容器。
- ・ 過去帳……ご先祖や有縁の方の法号（戒名）を記す霊簿。
- ・ 燭台……ロウソクを立てる台
- ・ 香炉……お線香をお供えする容器。
- ・ 線香筒……お線香の予備を立てておく筒。
- ・ お三方、お盛り物台……お鏡餅、果物やお菓子類をお供えする台。
- ・ お高坏……生菓子を供える台。
- ・ 経机……御看経用の机。
- ・ おりん……御看経のときの合図に打つもの。
- ・ おりん布団……おりんを乗せる布団。
- ・ おりん台……おりんを置く台。

- ・ おりん棒……おりんを打つ棒。
- ・ 木琴……御看経の導師が打ち、御題目口唱の調子を合わせるための鳴り物。
- ・ しゅもく……木琴を打つ棒
- ・ 拍子木……御看経のときに打ち、調子を合わせるための鳴り物。
- ・ 妙講一座折り本……正確には「本門佛立妙講一座」という。佛立宗における法要式の教本。
- ・ 教務用お天目……お講席やお助行等で、御講師がお供水をいただく器。(御導師の時は赤い器を使用)
- ・ お供水入れ……お初水とは別に私達がいただくためのお供水をお供えする容器。
- ・ 火打ち石、火打ち鎌（火打ち金）……お供え物をあげるとき、お給仕のお道具をお清めするとき、お給仕終了のあとの御宝前全体をお清めするときには打つ道具。
- ・ 消しツボ……使用したマッチ、お線香、ロウソク等を入れる容器。
- ・ おはたき……「天」御本尊の周り（内陣）をお清めする。「地」御戒壇の下の方（外陣）をお清めする。
- ・ 正宗徒証……正宗徒（入信して3年以上の常講願主）としての証。
- ・ お数珠かけ……常に使うお数珠や、おはたき等をかけておくもの。

○御宝前のお道具には「欠かしてはならないもの」と「あればより良いもの」があります。また、「絶対に違えてはならないところ」と「各々の好みによって変えてよいところ」もあります。

分からないときは自分で勝手に判断せず、御講師に質問して教えていただくようにしましょう。

まずは、「御宝前は御本尊がご奉安された、生きてましますみ仏のおわすところ」と思い、決してご不敬にならないようにお道具類をそろえ、真心のこもった毎日のお給仕を心がけることが大切です。

お供え物について

- ・ お供え物は、美しく荘厳に、随喜心をおこすような盛りつけをすること。
- ・ 包装紙やシール、袋がある場合は全て外す。
- ・ お上げする前には必ず切り火で清めてからお上げすることを忘れないようにする。
- ・ お三方の大きさをよく考え、安定して整った形になるようにお供えする。
- ・ いくら『立派な良いものを』といっても、御本尊や御尊像がお盛り物で隠れてしまうようなお供えの仕方はいけません。
- ・ 御宝前にお供えするものは、御法さまにお上げするものですから、新鮮なもの、形が崩れていないもの、汚れていないものを選んでお上げしましょう。御法さまに召し上がっていただくと思い、喜んでいただけるように、味の良さそうなもの、見た目が綺麗なもの、香りの良いものを選んで御宝前にお上げしましょう。
- ・ 土のついたもの（イモ類など）、臭いの強いもの（ネギ類やニンニク類）、肉や魚などの生ものはお上げしてはいけません。
- ・ お高坏にお上げするお菓子にも注意すべきです。昨今では和菓子といえど、クリスマスや

バレンタインといった、縁起物や宗教行事にちなんだものが多く見受けられます。たとえば、見た目が綺麗だからといって、クリスマスツリーを模したお菓子をお上げしてしまったりはしないように、気をつけて選びましょう。

- ・自分ではよかれと思ってさせていただいても、かえって不敬謗法の行為となってしまうことがあるという点に注意をいたしましょう。

ポイント

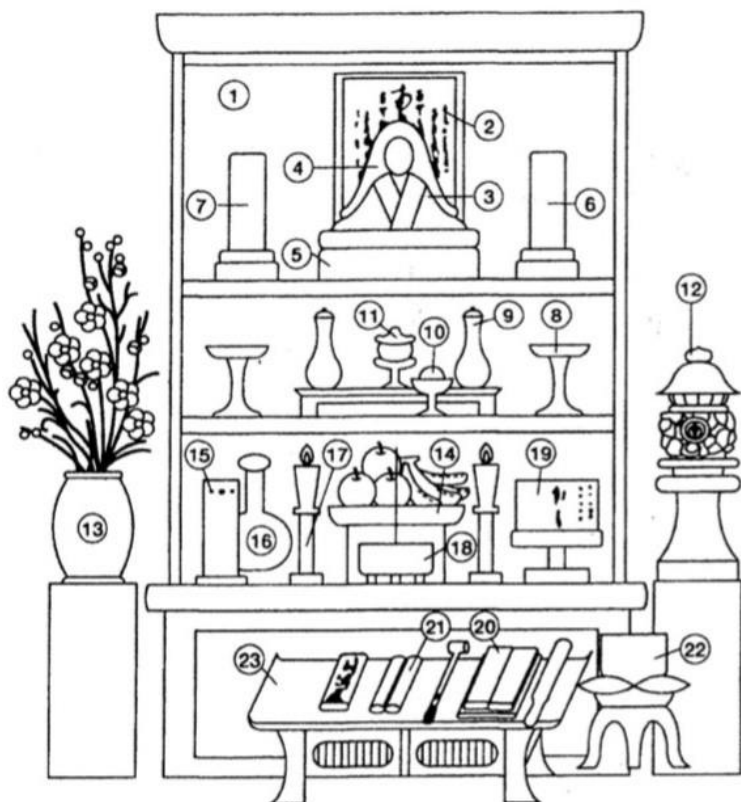
- ・お道具の名称を覚える。

お道具についてご指導をいただいたときに、名称がわからず見当違いの受け取り方をしてしまつては困ります。御宝前を荘厳するお道具の名称を覚え、お教務や先輩ご信者から指導を受けやすいようにしましょう。

- ・御宝前の荘厳の型を覚え、お飾りができる。

家の御宝前のお飾りだけでなく、御講席や助行先でも積極的に御奉公させていただくための基礎知識となります。

- ・正しくお飾りができているか、お道具の向き等も知っておく。佛丸が入っているお道具は、私たちから見て正面に向けること。



①ご戒壇	⑬花器
②御本尊	⑭お三方
③御尊像（日蓮聖人）	⑮ご祈願立て
④お綿	⑯お供水瓶
⑤ご礼盤	⑰燭台（ロウソク立て）
⑥門祖日隆聖人御位牌	⑱香炉（線香立て）
⑦開導日扇聖人御位牌	⑲過去帳
⑧お高坏	⑳木琴
⑨お徳利	㉑拍子木
⑩お仏飯器	㉒おりん
⑪お天目（お初水用）	㉓経机
⑫灯笼	

例 題

- お道具の名称を覚えているか。
- 正しい位置に安置できているか。
- お供えして良いもの悪いもの。

以上を確認ください

化他編

① 将引

目標

将引の意味を知り、実際に他のご信者に声をかけ連れ参詣ができるようになる。

概要

将引とは法華経随喜功德品第十八の「将引聴法華」が出典で、お寺や御講への参詣、またはご奉公に誘うことです。まだ何もわからないご信者は御講席へどう行けばよいのか、顔なじみもないので参詣が億劫になりがちです。そのような気持ちのところに、声をかけていただくと心強くもなり、参詣しようという気持ちがわいてくるのです。参詣しようという気持ちになるように参詣の功德、有難いことをお話できるように。

また、都合悪く何度か不参が続くと気おくれがするものです。安否を尋ねるようにして、参詣の声かけをしましょう。

参詣することで相手の方は功德を積むことができますし、参詣を勧めた私たちも菩薩の功德を積むことができます。

声を掛け合い、励ましあって連れ参詣に努め、ともに参詣の功德を積みましょう。

将引に関する御教歌

『さぞ人は何をいふとやおもふらむ 今は仏のつかひわれなり』

ポイント

- ・ 将引とは対象の相手が功德を積めるように、ご利益をいただけるようにと導くご奉公です。これは菩薩行そのものであり、将引する人自身も功德を積ませていただけるのです。今、私たちが声をかけなければ「相手の人はご利益をいただくきっかけを失ってしまうのだ」という思いをもって、積極的にご奉公させていただきます。
- ・ ご奉公成就のための祈願口唱に励む
- ・ 勇気を出して、声掛けする
- ・ メール、電話など手段の工夫と、どのような声掛けをするのかの工夫
- ・ お参りしてもらった後のフォローアップを。「お参り、ありがとうございました。何か、わからないことはありませんか。気になったことはありませんか。」等
- ・ 該当のご信者に対し、年に何回将引をしているか、毎月将引をしているか、等の具体的な記録を取り、今後のご奉公に役立てる。

例 題

○将引のご奉公成就のためのご祈願をしたことはありますか？

○将引の工夫をしていますか？

○どういう思いで将引をされていますか？

A. ①しないと言われるから

②相手の方が功德を積めるように

③嫌いな人にはしない

②連れ参詣

目的

相手の人を参詣将引して連れてお参りしましょう。

概要

ともに連れ立って参詣することを「連れ参詣」といいます。

信心が未熟なあいだは参詣しようと気持ちを起こしても、いざ参詣する時が近づくと億劫になるものです。また、自分一人では怠け心に負けて参詣しないこともあります。そのような時に「一緒に参詣しましょう」と同信の方に声をかけてみる。声をかけた方も、かけられた方も「参詣しますと言った以上は・・・」ということで奮起するきっかけとなるものです。

連れ参詣に関する御教歌

『奥深くわくる達者も足弱の ためには戻れ法の山口』

ポイント

・連れ参詣

連れ参詣とは対象の相手が功德を積めるように、ご利益をいただけるようにとお寺や御講席に連れてお参りするご奉公です。自分一人で参詣するのは自分の思い一つですが、家族や育成対象のご信者を連れ参詣するのは声をかけるところから、予定を合わせ実際に参詣するまで、いくつもの段階を踏む努力が必要です。これこそ菩薩行そのものであり、連れ参詣するご奉公者自身も功德を積ませていただけるのです。

今、私たちが声をかけなければ「相手の人はご利益をいただくきっかけを失ってしまうのだ」という思いをもって、積極的にご奉公させていただきましょう。

例題

○なぜ連れ参りが大切なのですか？

○連れ参りの大切な点を述べてください

○連れ参りの際、普段から心がけていることは何ですか？

③転教

目標

一人でも多くの人にご信心をお伝えできる信者になる。

概要

ご信心をお伝えすることが、自他ともに救われる菩薩行であり、最も功德の積める御奉公であることを知り、お教化のご奉公に前向きに取り組めるようにする。

ポイント

・ お教化とは

お教化とは自他ともに救われる菩薩行です。それは、お教化を受けた方が、信心を起こし、功德を積んで成仏の大果報を得て救われ、お教化を受けた人が救われる。また、救われる根本の教えをお伝えした功德は更に大きく、大変な功德が積ませていただけて、お教化をした本人が救われる。このようにお教化、ご信心をお伝えするということは、最も有難い御奉公です。

・ 化他即自行

仏道修行には「自行」と「化他」の両面があります。「自行」とは、自分のご祈願を叶えるための御題目口唱等、みずからのための仏道修行のこと。「化他」とは、教化・折伏・助行等、他の方が功德を積むために励む修行のことをいいます。お互いは、他の方の幸せを思い、化他の修行に励むことで、それがそのままみずからの修行、即ち自行となり自他共に御利益をいただくことができます。これがみ仏の御本意である化他即自行という修行のあり方です。

・ 五十展転随喜の功德

法華経の随喜功德品に説かれる「五十展転随喜の功德」の意を知る。

法華経の御法門を聞き随喜した人が教えを伝え、五十人目の人は教えの内容を論理的に伝えられずに、その随喜の思いしか伝えられなかったとしても、その功德は五十年の布施より勝れるという教え。

・ 実際に御法門の内容を、家族、友人、知人、他の人に伝えることを実践する。

・ ご利益談、体験談を進んでご披露しあう。

・ 実際に人に信心の話をしたことがあるか。まずは勇気をもって話をするところから始める。

・ 「経有り。法華と名づけたてまつる。共に往きて聴くべし」(随喜功德品第十八)

例 題

○お教化とはどういうご奉公ですか？

○聴聞させてもらった御法門の内容を他の人に伝えたことはありますか？また、その時の反応を話し合ってください。

④回向

目標

回向が亡き方に向けてのみさせていただくことではなく、皆に回向することが大事と知り、自己中心的な信心から、自ら積んだ功德を他に振り向けることのできる、化他の思いを持った信者になる。

概要

回向が自らの積んだ功德を他に振り向けることだと知り、それが菩提回向に繋がることを学ぶ。開導聖人も「我等の御奉公を回向第一と心得よ。口唱も、聴聞も、謗法を責めるも回向せよ」（扇全 14 巻 56 頁）と御指南くだされている通り、化他の思いを持って、回向第一に御奉公ができる信者を目指す。

回向に関する御教歌

『親からの宗旨をすてゝ孝行の とむらひとなる妙な法哉』

『ありがたや本時の娑婆の如説抄 あしたゆふべに浄土参拝』

『娑婆に入り娑婆の衆生を寂光へ 帰すは仏の使ひ也けり』

『みほとけに供へし徳は身につきて 生々世々にはなれぬときく』

『施餓鬼して経よまんより法界の 回向に口唱するぞめでたし』

ポイント

・本来の回向

世間一般では、回向とは亡き方に対するものという認識になりがちですが、本来回向というのは、自らの積んだ功德を他に振り向けることです。生きている方にも功德を振り向け、回向させていただくことが大事です。ご信者同士であれば、お助行や信心の育成。宗外の方に対しては、教化折伏というのが回向に当たります。

・回向とは

回向とは廻転趣向という言葉が縮められたもので、メグラシ、転ジ、オモムキ、ムカワセスことです。ごく簡単にいうとフリムケルということです。誰が何を振り向けるかという、自分が積ませていただいと功德を他に振り向けるのです。

・誰が何をフリムケルのか

自分の積んだ功德を将来のためにとっておく菩提回向

自分の功德を他の人へ廻してあげる衆生回向である。

- ・ ご回向と一口にいても、とにかくどこの宗派でもいいからお坊さん来てもらって拝んでもらえばそれでよし、というものではありません。亡き方のご回向は仏さまの一切のお悟りが込められている、万法具足の御題目でさせていただくことに限ります。本門八品所顯上行所伝の南無妙法蓮華經の口唱でしか、功德を積むことはできませんから、他の回向のやり方では、全くご回向になりません。今の時代、末法を生きる我々が唯一成仏できる正しい教えがこの御題目の教えです。

御教歌『親からの 宗旨をすてゝ 孝行の とむらひとなる 妙な法哉』

- ・ 本門佛立宗では、常盆常彼岸（常盆常回向）といって、お盆やお彼岸に限らず、常日頃から御題目口唱によるご先祖や有縁の方のご回向を大事にしています。
- ・ お盆の由来、目連尊者の仏説を知る
目連尊者は、慳貪（けんどん）の罪により餓鬼界に堕ちた母親を救うため、大勢の仏弟子に食べ供養をした。
- ・ 葬儀の際に言上される高祖御妙判「此法華經は三途の河にては船となり死出の山にては大白牛車となり、冥途にては灯となり、靈山へ参る橋也」（波木井殿御書）

例 題

○回向についてのご教歌をあげてください

○Q. 回向とは何という言葉が縮められたものか答えよ

A. ①廻轉趣向

②轉廻趣向

③廻轉向趣

○回向には二つあります。

○○回向と○○回向の空白を埋めてください。

⑤助行

目標

助行の意味を理解し、実践する人になる。そして、相手の信心を起こさせ、ご利益をいただかせる折伏ができる人になることを目指す。

概要

助行は、中心となる修行（正行）を補う行のことをいう。

当宗では、他の人を助けるための御題目口唱のことを助行と呼ぶ。仏祖が御題目を我々にお残しくださった理由は、一切衆生がその御題目のご信心によって功德を積み、現当二世に亘る心願満足することです。助行の功德は、自分のご祈願をしなくとも、助行の功德によって、自分の願いも叶えていただけるものなのです。

佛立信者は、助行の功德の大きさを知るゆえに、互いにいつも声をかけあい励まし合っ
て、信心増進をさせている。

助行に関する御教歌

『おのが身をいのらんとせば人をまた 助けんとする信者なりけり』

『助行には連れて歩けよ新教化 御利益を見て信心を増す』

お助行の種類

① 巡回助行

部や班内の信者宅を日を決めて隅々まで戸別に巡回する。

その際に義納金や諸々の御有志等を預かり、お寺からのご披露を伝え、お参詣をはじめ日頃の信行を勧め励ます。

② 交流助行

教区や部が相互に交流する。

③ 将引助行

御会式や御講などの行事にお参詣をお勧めするために行う。

④ 育成助行

信行のすすまないお宅へ信行育成のためにする。

⑤ 教化促進助行

幹部、役中、誓願者、未成就者等の教化を促進するために行う。

⑥ 祈願助行

受験や手術成功などを祈願する。

⑦ 命日助行

忌日や祥月あるいは毎月の命日等にする。

⑧ 詰め助行

日と時間を決めて一週間位、またはそれ以上、連続してお助行する。病気やお教化やその他特別に御願いのあるときに行う。

⑨ 連れ助行

新入信者等、他のご信者を連れてお助行。

⑩ 前助行

甲御講の無事奉修を祈願して行う。

お助行の実際 お助行をさせていただく側の心得

- ・ 教区部内組内の巡回助行を積極的にさせていただく。
- ・ お助行をする相手の実情を良く把握し、伺う日時、人数、拍子木の有無等を良く見極めてさせていただく。
- ・ 巡回助行の場合は御看経20分（無始已来言上等を含め）
お話 20～30分 長くても一時間位で切り上げる。
その他の祈願助行等は受持御講師の指示に従う。
- ・ お助行を受ける本人が御題目をお唱えすることが前提。
あくまでも相手の御祈願成就、信心増進が目的であるから、お助行する相手に「一緒に御看経しましょう」と一声かけ、必ず一緒に御看経する。（相手が病気などで一緒に御看経出来ない場合は家族と一緒に。当人にも助行の日時を知らせ、ベットで口唱に励むよう勧める）
- ・ お助行は祈祷ではない。
頼まれたから拜んであげるのではなく、本人自身が信心を起こし、決定できるよう手助けをする。
- ・ お助行に伺ったら、御看経だけして帰ってくるのではなく、必ず一言お折伏させていただく。（お寺参詣、御講参詣を勧める等の励ましの言葉をかける）
- ・ 話し上手より聞き上手になる。打ち明け話の中にお折伏の糸口がつかめる。ただし、先方から伺った話は口外しない。
- ・ 真剣な口唱をさせていただく。不真面目な口唱、居眠りなどは厳禁。
- ・ お助行を御願いされたら、何かあっても「そのうちに」はダメ。すぐ駆けつけるという心構えが大事。
- ・ 助行のメンバーを考えて先方の年齢や性別に応じる。
- ・ 相手のことを思う誠意でさせていただくのがお助行です。相手に見返りを求めたり、恩に着せる気持ちがあってはいけません。
- ・ 感情に走らない。売り言葉に買い言葉といった調子で、激しい言葉のやりとりになるとお助行は失敗してマイナスの結果になることもある。
- ・ 相手の随喜心を高めるような話題を選び、随喜心を失わせるような人の悪口、迷信じみた話は避ける。

- ・お助行のしやすい家ばかりを廻って、回数を増やすような安易なお助行にならないよう注意する。まだよくご信心が分かっていないご信者、不参がちのご信者宅を重点的にお助行する。
- ・導師の練習をする。誰でも導師が出来るように、日頃から言上の練習をする。(妙講一座に載っている言上文をそのまま読み上げても良い)
- ・お助行の輪を広げる。お助行は無量の功德を積ませていただける“尊い菩薩行”です。お互いに誘い合い励まし合い、お助行の輪を広げていきましょう。
- ・辛抱強く気長に育成する。佛立第十七世講有石岡日養上人は信者育成の心得として「一、おこるな 一、いばるな 一、あせるな 一、くさるな 一、負けるな」と仰せです。

お助行をいただく側の心得

- ・開導聖人はお助行に来てくださる方を「高祖ご来臨の思ひをなすべし」(扇全13巻336頁)と仰せられています。
ですから、よほどの都合があった場合以外は、お助行を喜んでお受けし、お助行して下さる方をお祖師さまのようにお敬いしましょう。
もしお敬いの心が薄ければ、御利益をいただくことができません。
- ・お助行を受けるときは、必ず一緒に座って御看経をあげる。
- ・お助行はご供養のいらぬことを徹底する。もしさせていただきたいのであれば、御講席をお受けしてそこでご供養をさせていただく。
- ・お教務さんに対する布施供養、お車代は必要ありません。
- ・お教務さんがいらっしゃるときは、おしぼり、お天目、お座布団を用意する。
- ・ご信者が導師をつとめるときは、お供水を用意する。
- ・お助行でのお折伏は素直にいただく。
- ・いつ誰がきてもお助行を受けられるように、常に御宝前のお給仕を徹底する。

ポイント

- ・正行と助行の意味を理解する。
正行とは御題目口唱のこと。助行とはそれを助ける行のこと。妙講一座や如説修行抄の拝読が助行に当たる。また他の人が御題目を唱えて御利益をいただけるように助けることを助行という。その場合御利益をいただく本人を正行者という。
- ・助行は「正行を助ける修行」「本門佛立宗独自の修行」「菩薩心を涵養する修行」であることを理解する。
- ・助行の功德によって、自分の願いも叶えていただけることを理解する。
- ・助行の体験談を他の人に伝えられ、助行の大切さを勧める信者になる。
- ・悩みや苦しみに困っている人がいたら、助行の計画を立て、また加行者を引き連れ、適

切な折伏ができる信者に育成する。

例 題

○正行とは何のことですか？

○各寺院においての助行の種類を述べなさい。

○実践面も含め、助行をさせていただく側、受ける側の心得を確認
ください。

⑥ご奉公

目標

御奉公の意味を理解し、率先垂範して御奉公できる人を目指す。さらに、御奉公の内容を把握して、異体同心のもと、指導できる人になる。

概要

御奉公は、私の我に蓋をすることで「公」、つまり自分の思惑や都合を優先させないで「奉る」「させていただく」というへりくだった気持ちをこめることをいう。ボランティアとは違う。

ご奉公に関する御教歌

『願くはつかひ給はれ奉公を するなんといふ身分ではなし』

御教句『うれしさは みのりのために する苦労』

ポイント

- ・御奉公とボランティアの相違を理解する

御法のためにさせていただくのがご奉公。罪障消滅の為、功德を積むために積極的にさせていただく。ボランティアでは滅罪生善の果報はいただけない。

- ・「御法のため」「時間をつくり」「喜んで」「させていただきます」という御奉公の根本精神を養成する。
- ・御奉公を実際に体験してもらう。
- ・御奉公の喜びを感得し、その喜びを他の人を気軽に伝えられる信者に育成する。
- ・寺内教区部役員、行事やお講などの御奉公内容を把握する。また、全体の責任ある立場で指示が的確にでき、部署の細かい動きを實踐でき、率先垂範できる信者になる。

例題

○ご奉公の心得を述べなさい

○ご奉公とボランティアの違いは何ですか？

○助行の實踐と将引はできていますか？

三祖について

①三祖聖人

目標

当宗の教えの親である蓮・隆・扇三祖聖人について学び、先師のご弘通ご奉公に思いを馳せ、本化の流類としての自覚を持ち、御題目を我も唱え人にも勧める菩薩行を実践できる信者となる。

概要

上行所伝の御題目を正しくお伝えいただいた私たちの教えの親である、お祖師さま日蓮聖人、門祖日隆聖人、開導日扇聖人をお敬いの心から三祖聖人と呼びます。「一器の水を一器に移す」とたとえられ、先師聖人からの教えを正しく漏らさず後世に伝えるのが信心です。

ポイント

・三祖一轍

日蓮聖人の亡き後、上行所伝の御題目を正しく伝えてくださった方が門祖日隆聖人です。門祖聖人は本門八品の教えを再興され、ただしい流れを取り戻されました。そして門祖聖人の教えを正しく受け継がれたのが開導聖人です。日蓮聖人、日隆聖人、開導聖人と上行所伝の御題目は正しく受け継がれているのです。

・上行所伝の御題目

久遠の本仏が法華経本門八品の中で上行菩薩を呼び出され、末法の衆生を唯一救済する御題目をお伝えくださいました。

その上首唱導の師である上行菩薩は仏様のご命令に従い、末法にお生まれになりました。鎌倉時代の日本国です。上行菩薩がお伝えくださった御題目こそが、法華経本門八品に説かれる御題目であり、末法の私たちが唯一救われる御題目です。私たちのお唱えする御題目を「上行所伝の御題目」というのです。

・他宗の御題目との違い

法華経は二十八品(二八話)で構成されています。

この前半十四品を迹門、後半十四品を本門と言います。

私たちが信じ奉る上行所伝の御題目は上行菩薩が在座する本門八品(十五品～二十二品)に説き顕される御題目です。この本門八品には上行菩薩が末法で御題目を弘めることが説かれています。これを上行所伝の御題目といいます。

※本門八品＝上行所伝が強調されるようにする。

※寿量一品二半の御題目と本門八品の御題目はその、取り処が違う。

・三祖聖人をあらわす紋

高祖大士は「鶴丸」、門祖聖人は「雁金（かりがね）」、開導聖人「佛丸」

・三祖聖人のお書物の名称

高祖大士は「御妙判」、門祖聖人は「御聖教（ごしょぎょう）」、開導聖人「御指南」

例 題

○三祖聖人とはどなたのことですか？お名前を述べよ

○教えを正しく漏らさず後世に伝えることのたとえとして「___の水を___に移す」と言います。下線に入る言葉は何か述べよ。

○蓮・隆・扇三祖により上行所伝の御題目が正しく受け継がれていることを「三祖___」と言います。下線に入る言葉は何か述べよ。

○私たちがお唱えする御題目を「_____の御題目」と言います。下線に入る言葉は何か述べよ。

○私たちがお唱えする御題目は、法華経のどの部分で説き顕されているか述べよ。

○本門八品とはどこからどこまでのことを言うか述べよ。

○当宗と他宗の御題目の違いについて、知るところを述べよ。

②高祖日蓮大士

目標

日蓮聖人について知る。

概要

お祖師さま日蓮聖人のご略歴を通して、お祖師様について知り、報恩の思いを持ち、ご奉公ができるようにする。

ポイント

① 御略歴と年号

- 承久4年【貞応元年】（1222） 2月16日
安房国東条郷小湊（千葉県鴨川市小湊付近）にご誕生。
幼名・善日麿。
- 貞永2年（1233） 12歳 安房清澄寺（天台宗）に道善房を師として入寺。
嘉禎3年（1237） 16歳 清澄寺で道善房を師として得度。僧名は是聖房蓮長。
嘉禎4年（1238） 17歳 鎌倉遊学へ出発。念仏及び禅を修学。
仁治3年（1242） 21歳 鎌倉遊学より清澄山へ帰還。さらに比叡山へ遊学。
建長5年（1253） 32歳 清澄寺に帰山。4月28日立教開宗。「日蓮」と改名
文応元年（1260） 39歳 7月16日『立正安国論』を上呈。
8月27日松葉ヶ谷法難
弘長元年（1261） 40歳 5月12日伊豆法難が起こり、伊豆伊東に配流される。
弘長3年（1263） 42歳 伊豆配流を赦免され、鎌倉に帰還。
弘長4年（1264） 43歳 11月11日小松原法難
文永8年（1271） 50歳 9月12日龍口法難・その後10月28日佐渡流罪
文永9年（1272） 51歳 2月『開目抄』述作。4月一谷に移される。
文永10年（1273） 52歳 4月26日『観心本尊抄』述作。
5月『如説修行抄』述作。
文永11年（1274） 53歳 佐渡流罪より赦免され鎌倉へ帰還。3度目の諫暁。
身延山入山。
建治3年（1277） 56歳 4月10日『四信五品抄』述作。
弘安5年（1282） 61歳 9月8日身延下山、9月18日池上宗仲邸（後の池上本門寺）
に滞留。10月8日六老僧を制定。10月13日辰の刻（午前7

～9時）池上宗仲邸（東京池上）にてご入滅。

・鎌倉仏教

鎌倉仏教とは平安末期から鎌倉時代にかけて新たに成立した仏教宗派のことで、いずれの宗派も民衆に受け入れられやすい易しい教えを説き、信仰によって救いを得るという点で一致している。それまで高い教養を身に付けた人しか学べなかった仏教が、武家社会の広がりとともに一般民衆にも受け入れられ浸透していった。

浄土宗（開祖 法然）

浄土真宗（開祖 親鸞）

時宗（開祖 一遍）

臨済宗（開祖 栄西）

曹洞宗（開祖 道元）

天台法華宗（開祖 日蓮）

・当時の世相

民衆の救済を説く仏教が弘まりながらも、当時の世相は戦乱や自然災害、飢饉や疫病により多くの死者を出していた。日蓮聖人はそのような現状に疑問を抱かれ、仏教を学ぶべく出家得度をされる。

ちなみに、同時代の歴史上の人物として、フビライハンや北条時宗等がいる。

・立教開宗

15年間のご遊学を終えられた日蓮聖人は、建長5年4月28日（1253年 御年32歳）千葉県清澄山旭ヶ森にて上行所伝の御題目の御弘通を誓われる。それは仏様のお心を習い損じた仏教諸宗へのお折伏の決意でもありました。

御教歌『吾祖師の宗旨びらきのはじめには 旭のそらに鶴の舞ひしと』

・日蓮聖人のお名前について

法華経の御文に

「世間の法に染らざること蓮華の水に在るが如し」（従地涌出品第十五）

「日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く」（如来神力品第二十一）

とあり、これらの御文が日と蓮の御名の出处である。

また、日蓮聖人は御名前のわけを

「明かなる事日月にすぎんや。浄き事蓮華にまさるべきや。法華経は日月と蓮花となり。故に妙法蓮華経と名く。日蓮又日月と蓮華とのごとくなり」（四條金吾女房御書）

とお示しです。太陽はこの世を照らして人々に光を与えます。蓮華は泥池にあって美しい花を咲かせ浄化作用もあるように娑婆世界を浄化する。

このような意味から、上行菩薩のご再誕であらせられるお祖師様は、「日蓮」と名乗られるようになったのです。

御教歌『吾祖師の御なは日蓮世の人の こゝろのやみを照す妙法』

・ 四箇度の法難

お祖師様は、三十数年のご弘通ご奉公をされるなかで様々なご法難をお受けになりました、その中でも大きな四つのご法難を四箇度の法難といいます。

①弘長元年 5月12日 御年40歳 伊豆伊東法難

②文永元年11月11日 御年43歳 小松原法難

③文永8年 9月12日 御年50歳 龍口法難

④文永8年10月28日 御年50歳 佐渡の御法難

・ 上行自覚

お祖師様は四箇度の法難、特に文永8年9月12日に発生した龍口のご法難、そこからおこる佐渡ご流罪を経て、上行菩薩の後身としての実証をあらわされた。

・ 三部の如説抄

開導聖人が日蓮聖人の御書、四百余篇中から選び出されたもっとも重要な三部の御書。

① 「如説修行抄」…信心修行の在り方。また修行上の覚悟を示された御書

② 「四信五品抄」…行者の位と信心口唱の大事を諭された御書

③ 「観心本尊抄」…御本尊を明かされた御書。最重要御書

の三つを三部の如説抄という。

・ 四箇格言

お祖師さまは多宗派を折伏する根拠となさったお言葉。

念仏無間：西方極楽浄土という世界の阿弥陀仏を本尊とし、死後の往生にて苦を逃れるという厭世的な救いを説く。この娑婆世界を救うという釈尊の教えに反するものであり、現実社会の苦しみからの逃避でしかない。

御教歌『此娑婆のわれらの父は牟尼世尊 弥陀は西方よその親也』

真言亡国：娑婆世界の教主釈尊を捨てて大日如来を主と崇め、仏教に説かれていない厄除けや祈禱を売り物にしている。迷信じみた占いや祈禱に身をゆだねる人が増えれば、文化は低下し国が乱れることになる。

御教歌『大日と釈迦各別と一国に 二人主を立る真言』

律国賊：戒律を持つことを教えるのが律宗であるが、持戒は末法の凡夫が成仏する修行方法ではない。末法は無戒であり御題目を受持することこそが本当の持戒である。

御教歌『末法は無戒の時としらずして 戒を持つと人をいつはる』

禅天魔 : 禅は自力で成仏に至る事を目的としているが、今日末法の私たちは仏道修行の能力が劣っている所以自力で成仏はできない。しかも本尊を立てず経典を軽視する教えは、釈尊をないがしろにするものである。

御教歌『禅宗は仏の説に順はず 是を天魔の眷属といふ』

例 題

- 日蓮聖人のお生まれになった年月日を述べよ。
- 西暦2022年は日蓮聖人のお生まれになってから何年になるか述べよ。
- 現在宗門が行っている慶讃ご奉公の名称を述べよ。
- 日蓮聖人は、建長5年4月28日(1253年 御年32歳)千葉県清澄山旭ヶ森にて上行所伝の御題目の御弘通を誓われました。このことを何と言うか述べよ。
- 開導聖人が日蓮聖人の御書の中から選び出された重要な三部の御書のことを「三部の_____」と言います。下線に入る言葉は何か述べよ。
- 三部の如説抄の御書名をそれぞれ述べよ。

③門祖日隆聖人

目標

日蓮聖人のお生まれ変わりとして、教えを清き流れにもどされてご奉公された日隆聖人のことについて知る。

概要

日隆聖人のご略歴や時代背景、御法難などを通して、日隆聖人について知り、報恩の思いを持ち、ご奉公ができるようにする。

ポイント

・御略歴と年号

- | | | | |
|---------------|------|-----------|---|
| 至徳 2 年(1385) | | 10 月 14 日 | 越中射水郡浅井嶋村（富山県高岡市郊外）に、桃井右頭尚儀公、益子の間に誕生、幼名長一丸と呼ばれる。 |
| 応永 3 年(1396) | 12 歳 | 5 月 10 日 | 遠成寺に入り慶寿院日深を師として出家。僧名を深円日立と号す。 |
| 応永 5 年(1398) | 14 歳 | | 上洛し妙本寺日齋上人の門に入り、叔父に当たる日存、日道師について修学、慶林坊日立と名乗る。 |
| 応永 12 年(1405) | 21 歳 | | 妙本寺山内法義・寺法乱れ出寺。 |
| 応永 17 年(1410) | 26 歳 | | 十カ条を挙げて月明を諫暁、折伏するも受け入れず妙本寺を離山。諸国遊学に出られる。 |
| 応永 22 年(1415) | 31 歳 | | 油小路高辻と五条坊門との間に本応寺建立。 |
| 応永 25 年(1418) | 34 歳 | 3 月 28 日 | 日存、日道両上人と妙本寺に帰山。しかし、5 月月明と本迹の法論で相容れず決裂、再度三師妙本寺を出寺。一旦本応寺に入るも月明の追求を受け妙蓮寺に移る。本応寺、放火により消失。月明の命を受けた 6 人に五條西洞院妙蓮寺大成坊で襲われる、しかし、不思議の御利益により 6 人は改心し、聖人を護る強盛な信者となる。三井村において火伏の符与えるなどとして前後 3 年布教。後に本巖寺を建立。この年、日立より日隆に改名か。 |
| 応永 27 年(1420) | 36 歳 | | 細川満元の外護を得て、辰巳の浜八幡社跡地に本興寺建立の基礎ができる。 |
| 応永 30 年(1423) | 39 歳 | | 本興寺（兵庫県尼崎）の諸堂宇完成。 |

- 応永 33 年(1426) 42 歳 御先祖供養のため越中中嶋村へ赴く。越前桑名色ヶ浜で疫病に悩む里人を救助。一村を教化して本隆寺を建立。さらに真言宗、敦賀大正寺を教化し改宗せしめ本勝寺と改称。
- 永享元年(1429) 45 歳 京都本応寺を再興。『四帖抄』を著し、洛中に回達、本迹勝劣本門八品上行所伝の宗要を闡明にする。
- 永享 5 年(1433) 49 歳 本応寺を六角大宮に移転「本能寺」と改称。
- 永享 7 年(1435) 51 歳 岡宮光長寺本果院日朝師と本能寺で面談、一味法水の盟約を結ぶ。
- 永享 11 年(1439) 55 歳 3 月河内古戰場を巡化。加納の薬師堂を法華寺と改称。
- 宝徳元年(1449) 65 歳 西国各地を布教、牛窓本蓮寺を改宗、備中本隆寺を建立。兵庫久遠寺、妙本寺末から寺檀共に改宗。日蓮聖人御本尊を本能寺に寄進。
- 宝徳 2 年(1450) 66 歳 本興寺塔中に勸学院を創立し、若い学僧の養成に当たられる。一堂を造り弘経院と名づけ（後の宇多津本妙寺）、弘経院法度を定める。
- 宝徳 3 年(1451) 67 歳 2 月 1 日『信心法度十三ヶ条』を定める。
- 享徳元年(1452) 68 歳 『五時四教名目見聞』を著す。
- 享徳 2 年(1453) 69 歳 8 月『開迹顕本宗要集』の著述を始める。『法華宗本門弘経抄』を脱稿。
- 享徳 3 年(1454) 70 歳 堺の仏師浄伝に自像を彫刻させる。
- 康正 2 年(1456) 72 歳 『開迹顕本宗要集』成る。
- 康正 3 年(1457) 73 歳 6 月『三大部略大意抄』を著す。
- 寛正 4 年(1463) 79 歳 5 月 13 日本能寺法度七ヶ条を定める
- 寛正 5 年(1464) 80 歳 2 月 25 日尼崎・本興寺にてご遷化。27 日入棺。29 日葬儀。
端座合掌（きちんと座られ掌を合わせた姿）のまま御題目をお唱えしながらご遷化（亡くなること）になられた。
そのご生涯は、本興寺内文庫堂にあらわれては八品（はっぽん）教学の集大成につとめられ、三千余帖に及ぶ大部の御著述を遺されている。

・ 日隆聖人当時の日蓮諸宗、特に法華宗について。

日蓮聖人の時代から 100 年以上の時が経過した室町時代、すっかり習損じて（本迹一致）しまっていた当時の法華宗をはじめ、余宗を改良させるご奉公に日隆聖人は精進さ

れる。

当時の法華宗はすっかり貴族化し、妙本寺の跡を継いだ公家出身の月明もその例にもれず、寺の行儀は乱れ、日蓮聖人の教えも曲げられてしまう状態であった。そこで同志とともに門祖聖人は改革運動を起こされ、再三にわたり月明を折伏されたが聞き入れられなかった。

ちなみに、同時代の歴史上の人物として足利義満、宗教界では日親等がいる。

・ご法難と現証弘通について

日隆聖人は妙本寺をお離れになり、別にご弘通の拠点を設けられて、妙法弘通を開始された。この頃「日立」から「日隆」とお名前を改められておられる。月明は逆恨みをして六人の刺客を差し向け、日隆聖人はお命を狙われるようになりました。大成坊というところで夜の勤行（お看経）をあげられておられた日隆聖人のもとに、刺客の六人が忍び込み息を凝らして打ち取る隙を伺いますが、その威厳に満ちた凜々しいお姿の前に、中々手を下すことができません。

すると突然、御本尊より一閃の光が差し込み、その光に驚いた刺客たちは刀を投げ捨てその場に倒れこみ、自分たちの愚行を恥じて懺悔したのであります。日隆聖人はこの六人に切々と折伏されたところ改良の念を起こして御弟子となり、ご弘通ご奉公の一助を担うご奉公をされるようになりました（六剣士の難）。こうして日隆聖人が難にあうたびに現証によって命を取りとめられたのです。

そのご生涯の間、現証ご利益によってご弘通（布教）は発展しました。当時の布教活動は、寺ごと・村ごとといったように大変スケールも大きく、織田信長が亡くなったことで知られる本能寺をはじめ、近畿一円から北陸、岡山方面にかけて計 14 カ寺を建立されました。

・勸請で言上される「蓮師後身 本因下種再興正導 門祖日隆聖人」について

「蓮師後身」とは「日蓮聖人の生まれ変わり」という意味です。

日蓮聖人が亡くなられたのが弘安 5 年 10 月 13 日で、その約 100 年後の至徳 2 年 10 月 14 日に日隆聖人はご誕生されました。この生滅の日の連なりからお祖師様のご再誕と信奉されています。

他にも、ご誕生の時に庭から産湯が湧き出したという奇瑞や、ご誕生時の国情が『下克上』の時代で同じであったこと、そしてなにより弘められた仏様の教えが一致していました。

日蓮聖人と同じく、法華経の本門八品に説き顕された仏さまの真の教え、上行菩薩所伝、本因下種の御題目を我も唱え他にも勧めて唱えさせる『口唱折伏行』に、ご一生を

かけられました。これらの理由から「蓮師後身」とお敬いを込めてお呼びするのです。

「本因下種再興正導」とは、日蓮聖人の清き教えに濁りが生じていたのをもとの流れにお戻しくださった、という敬意を示したものです。

仏様から日蓮聖人へと受け継がれた、本門八品所顕、本因下種の御題目のご信心。その尊い教えを再興され、我々を正しく導いて下さったその大恩に対し、本因下種再興正導とお呼びするのです。

「門祖」とは、八品門流の祖という意味で、日蓮聖人の御本意である本門八品の教えを再興正導された、日隆聖人を尊称する言葉です。

(参考資料 宗門公式HP『日隆聖人のご紹介』・佛立研究所発刊『久遠の水脈』等)

門祖聖人に関する御教歌

『此君のいまさゞりせば遠つおやの 清きながれを誰かくまゝし』

例題

- 「日蓮聖人の生まれ変わり」という意味で言上させていただいている言葉とは何か？
- 日蓮聖人の清き教えに濁りが生じていたのをもとの流れにお戻しくださり、我々を正しく導いて下さったその大恩に対し、言上では日隆聖人のことを何とお呼びしているか述べよ。
- 「八品門流の祖」と言う意味で、日隆聖人のことを何とお呼びしているか述べよ。
- 織田信長が亡くなったことで知られるお寺も、日隆聖人が建立されたお寺です。そのお寺の名前を述べよ。

○ご生涯で数多くのご著述を残された日隆聖人ですが、その数は「 余帖」と言われています。下線に入る言葉は何か述べてよ。

④開導日扇聖人

目標

当宗のご開講遊ばされた開導聖人のことについて知る。

概要

開導聖人のご略歴や時代背景、御法難などを通して、開導聖人について知り、報恩の思いを持ち、ご奉公ができるようにする。

ポイント

・ ご略歴と年号

- 文化十四年（1817）4月1日 日扇聖人ご誕生。京都蛸薬師室町西入る姥柳町南側（現、誕生寺）、小間物商「えびすや」・大路家、大路浄喜・国長男、幼名を仙二（次）郎、遷二郎とも書き、長じて仙（右）衛門とも延禎（のぶなり）とも称す。
- 文政九年（1826）10歳 当時の文化人を紹介した「平安人物志」の、書・画の部に載る。
- 天保十三年（1842）26歳 3月4日、母・すみ、のち国（久仁）が48歳で没。母の死没を期に仏門を志す思いが募る。仏道を志し、禅・浄土宗等を学び、日蓮宗一致派を学び、さらに能勢の妙見に参籠する。
- 天保十四年（1843）27歳 夏、江戸で重病となるも快癒を得る。
- 弘化元年（1844）28歳 帰京後 真言東密・叡山台密・禅・法華等を学ぶ。
- 弘化二年（1845）29歳 この年 門人を連れ、本能寺に揮毫の席を設けたのを縁に、秀典日雄の化に値い、本門八品のみ教えを受け本門法華宗に入信・授戒、改宗する。
- 嘉永元年（1848）32歳 1月24日 4月28日、日耀を師として淡路隆泉寺で出家得度、無貪と称する。尼崎本興寺に入寺するも、擯斥され、師とともに淡路に帰る。
- 嘉永三年（1850）34歳 7月下旬 西行庵にある頃、四国高松で松平左近頼該と僧守進の間に三途成不をめぐる皆久論争が起こる。
- 安政四年（1857）41歳 1月12日 京都千切屋・谷川浅七（郎）宅において本門佛立講を開講する。
- 安政五年（1858）42歳 大津大谷の小野山勘兵衛が重病を縁に入信し、妙益を得て、御牧卯兵衛・水分吉兵衛等を教化し、大津佛立講の弘通が始まる。

明治元年（1868） 52 歳 7 月 29 日 善福寺を首謀とする大津六十四カ寺に禁教キリシタンの者と讒訴され、法華堂の近く、往来にて不法捕縛され、京都六角本牢に投ぜられる。弟子・信徒も同時に投獄（第一の法難・大津法難）。8 月 4 日、無罪放免、京都府知事長谷少将信篤より出家を公許され、
「京都府御免出家」の鑑札を受ける。

明治二年（1869） 53 歳 1 月 10 日 妙蓮寺末・宥清寺を貫首・日成より借り受けて移り住み、「佛立修学所」の門札を掲げる。

明治十一年（1878） 62 歳 5 月、「本門佛立妙講一座」を制定し佛立講としての法式を定めるとともに信行の要諦を示し、6 月に印刷、全講下に配布して法要式の統一を計り、信心の改良を促す。

明治十四年（1881） 65 歳 8 月 15 日 自ら創案した「佛丸」を新たに正式に宗紋として定める。9 月 3 日、日蓮大士真筆本尊を拝写して六百回遠諱に備える。11 月 11 日より 3 日間、宗祖日蓮大士六百回遠諱を宥清寺および親会場で奉修、参詣者は全国より 1 万 5 千人。

明治十六年（1883） 67 歳 11 月 23 日、十七組の代表である岩崎弥七と他 7 名、計 8 名がその歎願書および 50 余名連署調印の請書（24 日付け）を提出し、清風の退寺隠棲を求める（十七組代表歎願）。11 月 26 日、現喜・日間に宥清寺の全権を委ねる証文を与える。

明治二十年（1887） 71 歳 4 月 5 日 先に退転した十七組の代表 4 名が清風を訪ね、懺悔を誓い、許しを請うたのに対し、同 7 日、書状を与え復帰を許す。

明治二十一年（1888） 72 歳 8 月 29 日 無病臨終を宣言。

明治二十三年（1890） 74 歳 筆止めの指南書となった、「十卷抄」4 巻の述作。

御遷化の一ヶ月前となる 6 月に神戸親会場の開筵式をお勤めになる。守口村、淀川堤の森田伊六の茶店（現、義天寺。大阪守口市）の奥座敷に休憩、7 月 17 日夕方 5 時 25 分頃、現喜、八尾が寝所を伺った時には既に静かな遷化、寂滅の姿であった、聖寿 74 歳。

・本山宥清寺と手自開眼について詳しくお伝えください。

本山宥清寺入寺の経緯

大津御法難後、本能寺塔頭龍雲院に身を置いていたが、立ち退きを迫られた。そこで時の貫主・日成師に請い、妙蓮寺末の宥清寺を学問所として借り受けることとなった。

本山宥清寺

正式名称：本門佛立山宥清寺 ※もともとは「青柳山宥清寺」

開創年：延慶元年(1308)

開基：越後の阿闍梨 日辨上人

手自開眼

お祖師さまご在世の頃、中老日法上人が彫刻し、お祖師さま御自らご開眼されたものと伝えられている。

開導聖人ご入寺頃の宥清寺

檀家も少なく、代々の住職は途中で退出し荒廃していた。

開導聖人ご入寺後の宥清寺

日夜、手自開眼御尊像にお給仕され、御題目口唱に励まれた。

このご奉公の功德から宥清寺には隆昌発展していった。

・開導聖人の得度当時の仏教界

江戸幕府の政策である「寺院法度」で各宗派毎に幕府の統制下に置かれた。また「寺請制度」によって庶民を強制的にいずれからの寺院に所属させられていた。

仏教各派の法論や布教を禁止されていた。

寺院は「戸籍管理」という幕府の機関として存在し、寺院の経済基盤を保障されていた。民衆もこの状態を当たり前と受け入れ、「葬式・回向」のみをする僧侶も増えていった。

・開導聖人がご活躍なされたご時代は明治維新の大変革時代。坂本龍馬や西郷隆盛等々が同時代の歴史上の人物としては有名である。

・勧請で言上される「開発教導」について

開発教導とは高祖、門祖のみ教えを時代に合わせて教えてくださった方という意。だからこそ、御指南や御教歌という形をお示しくくださった。

開発＝知恵や能力を導き出す＝信心が起こる

教導＝教え導く

※「高祖：末法有縁の大導師」「門祖：蓮師後身本因下種再興正導」という三祖一轍の流れを。前掲の「三祖聖人」のポイントを参照

・ご開講について

原因：本門法華宗内の「三途成仏と不成仏」の対立問題

三途成仏(皆成派)…畜生でも御題目で回向すれば成仏できる。

三途不成仏(久遠派)…自身の菩薩行によって成仏できる。

開講日：安政四年一月十二日

講元：谷川浅七

参詣数：四人 ※六人という説あり。

※現在、谷川浅七宅は「開講聖地」として宗門が護持されている。

・由緒寺院について名称と由来

誕生寺：開導聖人ご誕生の地に建立された寺院

大津佛立寺：本門佛立講の最初に建立された寺院

長松寺：開導聖人が御晩年をお過ごしになった奥の院。

義天寺：開導聖人御遷化の地に建立された寺院。

例 題

○当宗のご開講年月日を述べよ。

○明治元年（1868）7月29日 善福寺を首謀とする大津六十四カ

寺に禁教キリシタンの者と讒訴され、不法捕縛され、京都六角本
牢に投げられた法難のことを「___法難」という。下線に入る言葉
を述べよ。

○当時荒れ寺だった宥清寺を学問所として借り受けられたが、その
宥清寺にはお祖師さま御自らがご開眼された御尊像がご安置され
ていました。この御尊像のことを何と申し上げているか述べよ。

○ご開講に踏み切るきっかけとなった法華宗内の論争を何と言うか
述べよ。

○開導聖人の御遷化された年月日を述べよ。

参詣編

①御講

目標

お講の意義を心得、お講席に率先してお参詣し、他の人も将引して共々にご信心を磨きご利益のいただけるご信者となる。同時にお講願主、お講席主の功德を積むことを心がける。

概要

御教歌「御弘通の御奉公とて外になし 御講まゐりやまたつとめたり」

お講は当宗にとって欠かすことのできない御題目をお弘めするための「ご弘通の道場」です。「講」には解説教導という意味があり、解説教導とは人に教え示すことで、開導聖人は本門佛立宗のみ教えの筋を人々に教え示すためにご開講されました。ご弘通の為、ご開講より今日まで全国の各家庭でお講が奉修されています。

お講席は、世の中の皆が御題目をお唱えして平和になること、ご信者同士のご祈願が成就することを祈願され、先祖のご回向がなされます。そしてお看経の後には、御法門を聴聞し、ご信者同士がご利益談をご披露する尊いご弘通の道場です。

はじめに

御講の由来

御講とは、開導聖人がお祖師さまの正しいみ教えを伝え弘めるべく、安政4年（1857）1月12日、当時の信徒、谷川浅七宅（京都新町蛸薬師）を道場としてご開講されました。これをはじめとして、それぞれのご信者の家で御講が奉修されるようになりました。本門佛立宗では全国各地にお寺ができた今日でも、開導聖人の御意を忘れず、信者の家を道場として御講を勤めることを、一番大切なご奉公と位置づけているのです。

御講の目的

御講とはご弘通の道場です。

- ・皆で御題目を唱え、異体同心を図る場所です。
- ・御法門を聴聞し、正しい信心を学び、また信心の見直し、洗い直しをする場所です。
- ・信者同士お互いを励まし合っご弘通意欲を高める場所です。
- ・今日までご信心を正しくお伝え下された先師上人、先輩信者方に感謝する場所です。
- ・お寺からのご弘通方針、指示事項を徹底させる場所です。
- ・御講の願主となり、お教務さんを外護し、また参詣したご信者にご供養を差し上げ、布施

供養の徳を積む場所です。

- ・御講は功徳を積み、罪障消滅をする場所です。

御講の功徳

- ・御法門を聴聞することによって、ご利益のいただき方が分かる。
- ・正しい信心の仕方、人助けの仕方を学ぶことができる。
- ・たくさんの信者から、御利益談や体験談を聞くことによって、自分の信心が増進する。
- ・家の浄化。たくさんの参詣者の御看経により、土地や家の因縁をよりよくしていただける。
- ・先祖供養。たくさんの参詣者の御看経により、席主、御講願主の先祖のお弔いをさせていただける。
- ・その他、罪障消滅・信心増進・家内安全・所願成就などを御祈願していただける。

～御講《甲》～

お布施・ご供養の心得

- ・布施供養は功徳を積ませていただくものである。
- ・部内で金額を統一することは布施の精神にそぐわない。
- ・できる限り本人に用意してもらう。(半紙を折り、名前を書く)
- ・役中任せにしないよう、育成ご奉公に心がけ、お布施、ご供養の立て替えは厳に慎む。
- ・お布施、ご供養の入れ忘れ、入れ間違いに気をつける。
- ・布施供養は御宝前に差し上げるものなので、新札を用意するくらいの志を持つべきである。
- ・布施供養はお初を取り、その中からさせていただく習慣を身につける。

席主の心得

お席をすすんでお受けする

- ・家が狭い、遠い等という御講席を受けられないと断る前に、どうやったら奉修できるかを工夫する。
- ・お席を受けるということは、自宅をご弘通の道場、お寺にさせていただくことで、大変功徳が大きいということをしっかり心得る。
- ・御導師がお出ましになるということは、自宅で御会式を奉修させていただく程の功徳になる。随喜の念をもってお受けすること。

無事奉修の御祈願と御礼をする習慣を身につける

- ・月始めには朝参詣し、無事奉修の御祈願をお寺の御宝前に言上していただいて、自宅の朝夕の御看経で御祈願する。
- ・御講が無事奉修できたら、できるだけ早い内にお寺で、御礼の言上をしていただく。

御講の準備（前日まで）

- ・御講の前日までに隣近所の方に「何日は私の自宅で法要があり、何時から何時まで人の出入りがあり、ご迷惑をおかけします。」とあらかじめ声をかけておくことも大事な配慮である。

参詣者の心得

- ・お参詣者の将引を徹底する。
- ・甲御講は連合でお受けする御講であるから、願主でない人でもお参詣すること。
- ・車で参詣の場合には、高齢者の共連れ参詣をお勧めする。
- ・佛立第八世講有日歡上人は「お助行で信心を鍛え、御講で信心を整える」と仰せである。日頃からきめ細やかなお助行が御講の参詣増加につながる。
- ・御講の席、日時を間違えないように確認しておく。
- ・カレンダーや手帳に控えておく。
- ・御講席の距離の遠近、なじみの浅深に関わらず、御講には必ず都合をつけてお参詣させていただく。
- ・お布施、ご供養は役中に前もって渡すようにする。
- ・お数珠、妙講一座、お賽銭の準備を忘れない。
- ・御導師をお迎えするのであるから服装にも失礼のないよう配慮する。

当日編 役中の心得

—御宝前係—

- ・遅くとも一時間前にはお席へ着くようにする。（フクメンを忘れないようにする）

（御宝前全体の確認）

- ・お道具、お盛り物等の配置を確認
- ・前垂れ
- ・御導師用お天目（赤）中のお供水。補充のお供水の確認。
- ・願主名簿の再確認

（その他の確認事項）

- ・教化誓願簿
- ・御法門台
- ・御教歌浄書用の筆（筆の墨がきちんと出るか確認）
- ・半紙、バインダー
- ・お迎いの御看経を始める際は、御講用のお線香とは別のお線香をお上げする。（ロウソクの灯りはつけない）
- ・御導師が到着になられる電話連絡が入ったら、ロウソクの灯り、お線香をおつけする。

—お迎え係—

- ・前席の場合はお寺、後席（中席）の場合は前席へ、ご出発の30分前までにお迎えに上がる。
- ・出発のときと到着5分前の2回お席に連絡を入れる。

—御導師係—

- ・外で車の到着をお待ちし、お席へご案内。
- ・おしぼりを準備しておき、御講が始まったらお出しし、御導師が使われたら交換。久遠偈で下げる。
- ・品題の後の御看経のときに、御教歌浄書用の半紙（芳名帳）と筆を御講師にお渡しし、浄書済みのものを受けとる。
- ・雨天時はタオル等も用意。
- ・御導師のご供養のお給仕。
- ・御導師がお手洗いを使われる場合は、専用のおしぼりかタオルを用意する。
- ・御導師がお立ちになるときは、忘れ物がないかを確認する。
- ・席主と共にお見送りする。

—拍子木係—

- ・御講開始15分前から、お迎えの御看経を始める。
- ・集合住宅や隣と近隣に音が伝わりやすい場合は、拍子木の音をおさえる等工夫をする。
- ・御導師の後方に座る。（おりんの見える位置がよい）
- ・近くにいる参詣者は、拍子木係の妙講一座をめぐってあげる。
- ・妙講一座は床にそのまま置かず、敷物などを用意する。
- ・誰でも打てるように常日頃から練習しておくべきであるが、甲御講では特に上手な人を選ぶべきである。

—履き物係—

- ・玄関を整理整頓する。
- ・御導師用のスリッパを用意する。
- ・御導師と御講師の靴の管理をする。
- ・参詣者の靴の履き間違えのないよう注意する。
- ・靴べらの確認をする。

—役中—

- ・新入信者やお参詣に不慣れなご信者には、妙講一座のお唱えの順序をお教えする。
- ・新しいご信者にはこちらから話しかけ、御導師、他のご信者にも紹介するなど、気配りを忘れない。
- ・お参詣者の氏名、人数は集計し記録に残すこと。（次の将引の参考のため）

- ・ご供養の際は、御導師の近くにいるようにし、質問があればお答えする。

席主の心得

- ・御講の将引は役中任せにするのではなく、席主本人も将引に励む。
- ・お盛り物、お高坏、お花等の御荘厳。
- ・前垂れ、ロウソク、お線香、御導師用のお天目、おしぼりの用意。
- ・水差しを用意する。(ペットボトルでも可)
- ・玄関、部屋、トイレの清掃チェック。
- ・ご供養の最終チェック。
- ・御導師が到着されたら、お迎えをさせていただく。
- ・ご供養の準備は御講が始まるまでに済ませておき、しっかり御看経、御法門聴聞をするよう心がける。
- ・席主の家族も御講が始まったら、着座し参詣する。
- ・電話が来たときは用件を簡略にする。
- ・御法門終了後、お布施のご挨拶と参詣者への挨拶をさせていただく。
- ・御導師がお立ちになるときはお送りさせていただく。

参詣者の心得

- ・携帯電話はあらかじめ電源を切るか、マナーモードにする。
- ・定刻の30分前にはお席に着くよう心がける。
- ・御講席に着いたら、まず御宝前にご挨拶をする。
- ・席主宅のプライベートな空間に立ち入らないよう配慮する。
- ・お賽銭の小銭は事前に用意する。(お賽銭で両替やおつりをもらうことはしない)
- ・お席に着いた順から前に詰めて着座する。
- ・大きな声で、声を揃えて御看経しましょう。
- ・皆で口唱しながら、御導師の到着をお待ちする。
- ・お数珠や妙講一座を床に直置きしない。
- ・御講の奉修中は私語や物音を立てない。(特に言上中、御法門中)
- ・信心増進するような話を心がける。謗法じみた話、迷信じみた話、人の悪口、愚痴話に陥らないよう注意する。
- ・御講が終わったら皆で後片付けを手伝い、長居しないようにする。
- ・一日随喜の念で生活をし御利益談や御法門の内容を家族にも伝える。

ポイント

- ・御教歌とは

佛立宗を開かれた開導聖人は、み仏の教えを日本古来から親しまれてきた三十一文字の

短歌（和歌）に詠まれ、難解な仏様の教えを平易に、そして覚えて実践しやすいようにおのこしくさいました。その歌を御教歌といい、御教歌をいただいて御法門が説かれます。

・御講奉修の始まり、そしてその意義を学ぶ。（御法門用語事典324頁参照）

・御講の流れを知る

御講を奉修させていただくには、ご奉公者が必要です。お講奉修の流れと奉修に必要なご奉公役課を把握し、拍子木、お給仕、ご披露などのご奉公をさせていただくことが大事です。

・御講席主をお受けする。

御講をお受けする席主は、そこがそのままご弘通の道場となりますので、功德の深いご奉公となります。

・参詣将引の大事

御講席には、席主、願主、お参詣者、そして結縁者がお参詣されることが理想です。ご信者同士の将引は勿論のこと、一般の方（結縁者）も御講席にお誘いすることが大事です。

・御講の願主と席主

御講奉修には席主と願主があります。願主とは御講奉修の発起人のことで、席主はその中で席を提供する願主のことです。願主はお布施をお包みし、布施行の実践と外護の功德を積みます。本門佛立宗の信心を正しく実践させていただくには御講の願主になることが必要です。

御講に関する御教歌

『御弘通の御奉公とて外になし 御講まゐりや又つとめたり』

『参詣もそんする也とおもふゆえ 御講参りもいやになる也』

『講中と成て御講へ参らねば 講の外なる人にかはらず』

『お講には参れば参る参らねば そんといふことしらぬ罪障』

例題

○当宗の開講記念日となっている御講の年月日、また席主の名前を述べよ。

○あなたのお寺ではどのような御講がありますか？知るところを述べよ。

○次の御教歌の空欄を埋めなさい。

の御奉公とて外になし 御講まゐりや又つとめたり

②寒参詣・夏期参詣

目標

一日でも多く参詣させていただき皆参を目指す。

概要

寒参詣はお祖師さまが佐渡ご流罪の時、寒さに耐えられながらご弘通なされたご苦勞をお偲びし申し上げ、お寺の御宝前にお仕えして1年のご奉公成就をご祈願する修行です。

夏期参詣は1年の中頃にあたる7月から8月にかけて、暑い中お参詣に励むことによつてご信心の緩みを締め直す為の修行です。

お子さんの夏休みにも重なります。信行相続のためにも家族揃つてお参詣できるよう、声かけにも工夫を心がけましょう。

ポイント

- ・寒・夏のお寺参詣は、宗門からの特別な御法門を聴聞させていただきます。素直な聴聞を心がけて、改良のきっかけとしてご信心に磨きをかける良い機会と心得ましょう。
- ・各寺院のみならず、宗門全体でお寺参詣に気張らせていただく大切な行事です。ご信者さん1人ひとりが参詣に励む気概を持てるようにしましょう。

例題

○寒参詣は、どなたのご苦勞をお偲びして実施されるお参詣ですか？

○寒参詣は全国一斉に何月何日から開始されますか？

○夏期参詣の目的の一つとして、家族の何の為に行われますか？

③行事

目標

所属寺院における月々の行事を把握・確認し、一生涯御法様にお護りいただける信心前を身につけ、御宝前へ感謝の気持ちを忘れないご信者とならせていただく。

概要

御宝前が幸せの根源です。世間での一般的な習慣や年中行事に惑わされることのないよう、日頃からお寺をどういう場として捉えているのかを考え、どんなことでも相談、報告できるよう、普段からお寺・御住職・教務さんが身近な存在であるように互いに心がける。

ポイント

- ・お寺の年中行事を確認する。
- ・大切な人生の節目には、日々沢山ある。季節ごとの通過儀礼を、ゆりかごから墓場まで全てを御本尊にお任せさせていただくとの思いで、お寺の御宝前にお礼言上、ご祈願をさせていただき常に感謝のできるご信者になる。
- ・お寺の月ごとの行事を話し合い、確認し合ってください。

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

- ・お寺の行事を他人事と思わずに菩薩の心を起こし、僅かでもお役に立てるよう心からのご奉公をさせていただく。

例題

○お寺の行事を10個述べてよ。

④御法門聴聞

目標

善聴参詣に心がけ、即聞即行、随喜転教に励むご信者となる。

概要

仏道修行は、仏さまの教えを聞き、み教えに従って修行に励むことによって、功德をいただくことができます。これを「依経立行（えきょうりゅうぎょう）」といい「如説修行」といいます。ご信心は、仏様の教え、御法門を聞くところから始まるのです。

※宗風第一条 善聴「我が信を決せんには法を聞べし、他を化せんには法門を習うべし」（扇全二巻三七二頁）のみ教えを奉じ、法門の善聴に心がけ、即聞即行、随喜転教に励む。

御法門に関する御教歌

『歌にして教へておけばいつまでも 御法門をばわすれざりけり』

『法門を聞かぬ間は凡夫にて 仏のちゑの出るよしなし』

『聞いた通りするが信心我が思ふ 様にするのは信心でなし』

ポイント

- ・御法門とは、仏さまのお悟り、ご利益へつながる門、入口ということです。当宗では、教務が開導聖人がお詠みになられた御教歌（約3,400首）を中心に仏さまの教えを分かり易く説き、仏さまのお悟り、御利益の世界へ導いてくれます。
- ・御法門を聞くことを「聴聞する」といいます。耳を傾けて、よく聴かせていただくということです。御法門は、お寺や御講席で聴聞することができます。一度でも多く、お寺やお講席に足を運んで聞き漏らさないように聴聞させていただこうとの心掛けが大事です。
- ・御法門の意味を知り、重要性を認識する。御法門とは何かを知り、ご信心をさせていただく上で欠かすことのできないものであることを認識する。「信心は身の柱、家の柱也。当講に法門なくば家に柱なきが如し」（扇全27巻259頁）
- ・聞法信受
仏様の教えは、我欲を中心にした私達凡夫の考えとは、逆さまでであると教えられます。（凡夫顛倒）ですから、真っ新たな気持ちで、そのままいただくという聞き方が必要です。

・即聞即行、随喜転教

聴聞したことは、聞き流して終わるのではなく、そのまますぐに改良実践し、聴聞した
み教えや、体験したご信心の喜びを周囲の人に積極的にお伝えするように努めることが大
切です。

例 題

○御教歌はどなたが創られたのでしょうか？

○御法門を聞くことを「___する」と言います。下線に入る言葉を述
べよ。

○聴聞したことを聞き流すのではなく、そのまますぐに実践に移す
ことを漢字四文字で何と言うのでしょうか？

⑤お供水

目的

自宅の御宝前にお水を供え、御題目をお唱えして、お供水とし、毎日いただく習慣をつける。特に体調を崩したときには、第一の良薬と信じていつも以上にいただくようにする。

概要

御題目で開眼された功德水を「お供水」といいます。御宝前に水を供え、御題目をお唱えさせていただくことにより、仏様の魂が宿り御題目で開眼された功德水となります。

お供水をいただくことによって病気をよく治し、健康のお計らいをいただくことができます。特に御題目のよく上がったお供水は功德が大きいといわれています。

普通の水であるという感覚で、飲んでもなかなかお力があらわれてまいりません。いきまします仏様の御魂の宿った功德水。第一の良薬と心から信じて、御題目をお唱えしてから、敬っていただきましょう。

「御供水はありがたいので、薬を飲むときに一緒に飲む」これは間違った考えです。第一の良薬が御題目であり、お供水ですから、薬をお供水で飲むということは、かえってお供水を軽しめることとなりますので、一緒に飲むではいけません。

お供水は毎日いただく分量を決めて、毎日継続していただくように習慣づけることが大切です。

御指南

「少子とても とかく罪障滅しがたくてと思う時には 懺悔をいたし はじめてこの大法を持ち参らせ候時の心になりてお供水をいただき いたき処にぬりもし 呑みもいたし候 軽しめず あなどらず 重くうやまい信じて御いただき候えば ふしぎに御たすけをうるものに候」(松風余韻 佛立聖典 618)

ポイント

- ・お供水は御題目そのもの。第一の良薬

御宝前にお供えし、御題目で功德化したお水です。先ずはいただく事。ありがたさが判ります。

「御供水は水と見ゆれ共水にあらず御題目也。諸の薬の中には南無妙○經第一の良薬也。故に水に非ず御題目也」(扇全 15 卷 154 頁)

御教歌『のんで見て御利益を得てなる程と そこで薬の第一をしる』

- ・御供水は仏様の御魂の入ったお水、金色の功德水

「上三宝の宝前にそなへ御題目を唱へて水の性体自然の妙理の上に本門肝心上行所伝の妙法を口唱し、仏の御たましひを入たる水なれば、とりもなほさず金色の功德水也。この御供水にてなほらぬ程の罪障の病気ならばすべなき事也。罪障消滅をいのらんより外なしと決定したるは上の信者也」（扇全 2 巻 173 頁）

- ・お寺の御供水は各別

「按摩の上手下手はむみ料の高下によらず。但し下手の按摩に高直は。人雇はず。御供水は同じけれど御寺のは格別」（扇全 11 巻 57 頁）

- ・分量を定めて毎日いただく

「御供水を頂くにも分量を定めて毎朝頂くべし。するとせぬとは大なる違也」（扇全 13 巻 78 頁）

- ・お供水は御題目であると心からお敬いをもっていただく

「御供水を水也と思ふ間は、まだ御利益はいただかれぬ人也」（扇全 13 巻 310 頁）

お供水をいただくとき、腰に手を当てて片手で立って飲んだり、片手で茶碗に口を近づけて飲むようなことはせず、座って一礼して両手で敬っていただく。

- ・薬と一緒にお供水はいただいてはいけない

「信者は病気本服をねがひながら、されども薬をのまねばこの病は治しがたしと、われとわがてに心の底に思ふところありて、いろいろとわが了間にて道理をつけ。あるひは御茶湯御供水等をも薬をせんじる水に合して御題目をもとなへのむ也。これは御供水等をも半ばゝ疑ひ、半ばゝ信じて今のむ所の薬のたすけに御題目を用ゐる也。」（扇全 2 巻 173 頁）

例 題

○お供水は「飲む御題目」とも言われ、御題目の功德が詰まった

「____水」と言います。下線に入る言葉を述べよ。

○お供水は「第一の____」と言われます。下線に入る言葉を述べよ。

○お供水と似たものとして、他にも御宝前にお供えし、飲んだり患部に塗ったりするものがいくつかあります。「お〇〇さん」と呼ばれるものですが、知る限りのものを記せ。

⑥挨拶・礼儀

目標

社会人としてはもちろん、宗門人として恥ずかしくない所作振る舞いを身につける。

概要

宗門人としての自覚を持ち、信心に基づく行動、言動が出来るようになることで、世間においても、一目置かれるような人となれる。「名で教化が出来る」ようになれば、ご弘通の出来る信者となる。

ポイント

- ・挨拶が出来るというのは社会人として当たり前のことです。コミュニケーションはここから始まります。当宗の挨拶を覚え、実践する。
- ・生まれ難い人界に生を得て、お出会いし難い正法にお出会いした随喜の念を込めて「ありがとうございます」と挨拶を交わすしきたりになっています。
お寺やお講参詣はもちろんの事、御題目をお唱えさせていただく者同士、ご信者同士が顔を合わせた時の挨拶は笑顔で「ありがとうございます」とご挨拶させていただきます。
※時と場所を考えることをお忘れなく。相手がお看経中のときや、御法門聴聞の最中は声を出しての挨拶は控え、会釈程度でよい。

御指南

- 「我等凡夫の極悪人 如来の御慈悲にもれざれしやと 我身をかえりみ 有難う存じまると口ぐせのように申せ」 (扇全7巻245頁)
- ・本堂に入るときは帽子やサングラスをはずし、一礼して入るのが基本。電話で話ながら出入りするような非礼ともとれる態度は慎む。
 - ・当宗では、ご信心を姿形に現していきます。ご信者らしい所作振る舞いを心掛ける。
 - ・佛立宗の寺院においては、教講共に異体同心でご奉公させていただく。皆が仲良くなるのは結構ですが、教講の能所、信心上のマナー等を守らなければただの馴れ合いになってしまいます。私たちはあくまでご信心をさせていただいている事を忘れてはなりません。
 - ・ご信者同士のお金の貸し借りは御法度です。トラブルにも繋がるので堅く慎むこと。
 - ・お寺は公共の場所です。更にいえば、「お寺の物は祖師の物」ですから、お寺を私的に利用したり、お寺の備品を勝手に使う事があってはなりません。どんなものでも、ご奉

公のために使わせていただくという意識を持ちましょう。

例 題

○宗門人の挨拶は何か。その言葉を述べよ。

○ご信者同士の御法度とは何か述べよ。

本門佛立宗について

①宗名

目標

本門佛立宗の宗名を正しく言え、正しく書くことができる。そして、自坊の寺院名やご住職名を言える。さらに、宗紋の形や制定者、宗名に関する簡単な知識をもち、宗外者にも気軽に話せるようにする。

概要

本門佛立宗（ほんもんぶつりゅうしゅう）という宗名は、開導聖人がご創案の名称ではありません。

この宗名の歴史は遠い昔から始まり、古い歴史を持っていますが、開導聖人によって宗門の名として発表されるまで表立って伝えられていなかっただけなのです。

この本門佛立宗を建立し、その教えをお弘めになられた方、それは高祖日蓮大士＝お祖師さまであり、「当に知るべし、今の法華宗とは諸経中王の文に依つて、之を建立す。佛立宗とは釈迦独尊の所立の宗なる故なり」（法華宗内証佛法血脈）とお示しです。

日蓮聖人は、み仏の真意が説かれた法華経の教えに基づくならば、その宗団の名前は「久遠本佛の立てた宗」「佛立宗」と称すべきと明記されました。

また日扇聖人はこの名前について「本門佛立講と申は、宗祖出世の御本懐、上行所伝の御題目を広宣流布せしめんが為の故に、とり結びたる講也。法華宗のみは、仏の立させ給ひし宗旨なる故に佛立講と申し、天台宗に紛れぬやうに、本門と申也」（扇全6巻82頁）とお示しです。

《参考資料 本門佛立宗ホームページ》

ポイント

- ・ 本門佛立宗の読み方、書き方を理解している。
- ・ 自分のお寺の名前、ご住職の名前、場所を言える。
- ・ 本門佛立宗と日蓮宗諸教団、また各宗派の相違を理解する。

「一代五時図」（御妙判集第2巻556頁）

- ・ 佛丸について

明治十四年（1881）65歳 8月15日 仏立の文字をモチーフとして開導聖人自ら創案した「佛丸」を新たに正式に宗紋として定める。

- ・ 十二宗名について

門祖日隆聖人が十三問答抄という御書の初めに、当宗の教えの筋道の肝要を十二の名前をもってあらわされました。これを十二宗名（じゅうにしゅうみょう）といいます。

「日蓮宗と云者、過去宗也・下種宗也・本門経王宗也・事相宗也・無智宗也・信心宗也・

易行宗也・経力宗也・口唱宗也・名字即宗也・教弥実位弥下宗也・直入法華折伏宗也。」とお示しです。開導聖人はこの御指南を拝見せられ、この十二通りの名前を「十二宗名」と名付けられ、当宗の宗義の肝心をあらわされたものとされたのです。

例 題

- 本門佛立宗と名乗る前は何という名称であったか述べてよ。
- 本門佛立宗という宗名は、開導聖人がご創案の名称ではありません。ではどなたがご創案されたか述べてよ。
- 十二宗名のうち、知るところの宗名を5つ述べてよ。

②寺院名山号

目標

本山、宗内寺院にまつわる知識を蓄え、宗外者にも話せる程度を目指す。

概要

本山宥清寺の正式名称や歴史、重要文化財、本門佛立宗の由緒寺院に関することを学び、宗外の人にも佛立宗の優位性を話せるようにする。

ポイント

- ・お寺について理解する。

各地でご弘通が発展していく中で、その当時のご信者方の思いから建立されたもの、それが皆さんの所属されているお寺です。

各お寺では日々、御題目口唱の声やご奉公の姿をその土地の方々にお伝えするご弘通の発信基地であり、私たちが罪障消滅、積功累徳をさせていただく道場でもあります。

各お寺の寺院名や山号については所属のお教務さんにお伺いしてみてください。そして自分たちが所属しているお寺の名前をしっかりと覚えましょう。

- ・由緒寺院について理解する。

誕生寺（京都府中京区）…開導日扇聖人ご誕生地に建立されたお寺

大津佛立寺（滋賀県大津市）…本門佛立宗最初のお寺

長松寺（京都府下京区）…開導日扇聖人が最後晩年に御隠居された本山の奥ノ院。

義天寺（大阪府守口市）…開導日扇聖人がご遷化された場所に建立されたお寺。

- ・四箇道場

本山宥清寺、誕生寺、大津佛立寺、義天寺のことをいう。

- ・三大奉納金について理解する。

一年の財のご奉公の中で、三つの大きなご奉公のことです。これら奉納金が宗門護持のもととなります。浄財は宗門から支庁、布教区を通じて宗内各寺院へ下付されて御弘通（教えを弘める）ご奉公に活用されるのです。具体的には以下の通りです。

○本山初灯明料（一月奉納）

新春にさいして全国のご信者がお供えさせていただくものです。毎月、毎日のお初をとって功德箱に積み立てておき、精一杯の志しを本山御宝前にお供えしましょう。

○宗門総回向料（七月奉納）

宗門総回向とは御講有上人ご親修のもと多数の御導師が出座される法要で、全国の皆さんが申し込まれた精霊のご回向を丁重に勤めていただきます。

○高祖会全国奉納金（十月奉納）

本山高祖会にお供えさせていただく奉納金です。

・本山宥清寺について理解する。

当宗の本山「本門佛立山 宥清寺」（現在の地は京都上京区北野）は延慶元年（1308年）に日蓮聖人の直弟であった、中老越後阿闍梨日辯聖人によって開かれました。

藤原定家の末裔を教化し、定家の旧跡を寺院としたもので、もとは青柳山本門寺と称し、関西に於ける日蓮門下最古の寺院です。

その後、戦乱を避け、転々としましたが、元禄7年（1694年）に現在の開導聖人御墓所のある京都御前通一条下るにあった宥清寺を求め「青柳山宥清寺」となりました。

そして、大津御法難後の明治2年、この宥清寺に開導聖人が入寺をされ、佛立講の根本道場と定め、弘通に当たられました。

昭和6年8月、高祖六百五十回御遠諱を迎えるに際して、北野森滝ヶ鼻町に建立開筵し本門佛立宗の根本道場として現在に至ります。

・高祖手自開眼御霊像について理解する。

日蓮聖人の直弟であった中老日法上人が謹刻されたもので、日蓮聖人自ら手自開眼された最古のご尊像です。開導聖人が宥清寺に入られてから、そのご尊像に直接お給仕できることを誇りとされました。

謹刻された当初のお姿はまったく極彩色の絢爛豪華な御像であったのですが、彩色等が剥落し、長い年月の間に沢山の山の人々に拝まれて、ロウソクのススとお線香などにより全体的に黒化というか、古色ゆかしいお色とお姿になったのです。

開導聖人はその古色ゆかしいお姿お色のおもむきを、そのままご信心にいただかれ御霊像の御写しとして御尊像を黒くされたのです。

佛立教講もそのご信心を受け継ぎ、お給仕の誠をささげております。平成元年に重要文化財として国から指定を受け、現在宥清寺本堂右側のお厨子にご安置されています。

・御講有について理解する。

御講有とは開導聖人以来、一器の水を一器に移すがごとく、連綿と受け継がれてきた本門佛立宗の総導師であるとともに、本山宥清寺の御住職のことです。本山を拠点に日本各地や世界各地にご巡教なされ、ご教導をいただきます。

・本山中心信仰について理解する。

宥清寺は、いくつも本山がある他宗とは違い、本宗唯一の本山であり、全ての宗門人の根本道場（本門佛立宗根本道場）であって、御弘通の中心です。

「本を良くして枝葉が繁る」（第十七世講有石岡日養上人のお言葉）ように、当宗の根本である本山を敬いご奉公させていただかなければ、各寺院、各家庭も良くなっていきません。

ですから当宗では、本山中心信仰と言われ、三大奉納金をお供えし、事あるごとにお参詣をさせていただき、本山御宝前を護持させていただいて、報恩の誠を尽くすのです。

・現在全国に約300ヶ寺の末寺・別院があり、また海外ではアメリカ、ブラジル、オーストラリア、韓国、台湾、イタリア、スリランカ、フィリピン、インドなどにも寺院があり年々信者が増え、その他の地域にも広がっています。

例題

- 現在、世界中にある本門佛立宗の寺院は約何ヶ寺あるか述べよ。
- 所属するお寺の山号と寺院名を述べよ。
- 三大奉納金の名称をそれぞれ述べよ。
- 御尊像が現在の色となった由来について、知るところを述べよ。
- 現在の御講有上人で佛立第何世になるか述べよ。

③御会式

目標

御会式について理解し、ご参詣やご奉公をさせていただけるようになる。

概要

御会式とは弘安5年10月13日に日蓮聖人が武蔵の国（今の東京・池上）の池上宗仲邸でご入滅されたことに始まります。翌年の10月13日には日蓮聖人のお弟子・信者が各地から集まり、上行所伝の御題目を唱え、ご法味を捧げるようになりました。

遠い佐渡からも、駿河の国からも、安房からも、上総・下総（関東一円）からも、皆がこの日を目指して御弘通に励み、その成果を持って集まり、一同に顔を揃えたことから御会式という名になったのです。

ポイント

・三大会

高祖日蓮大士・・・高祖日蓮大菩薩御会式（高祖会）

門祖日隆聖人・・・門祖日隆聖人御開山会（門祖会）

開導日扇聖人・・・開導日扇聖人御正当会（開導会）

- ・お教化など御弘通のよいご報告ができるように努めましょう。
- ・家族そろってお参詣が出来るように年初に予定を入れましょう。
- ・御会式前は晴天無事奉修のご祈願をさせていただきます。
- ・自分一人の参詣に終わらせることなく、他の人もお誘いしお参詣の功德を積まさせていただきます。
- ・ご有志やお塔婆建立をさせていただきます。
- ・本山へのお参詣はもちろん、他寺院への参詣もさせていただきます。
- ・御大会はお寺の全信徒が願主です。皆で奉修させていただくつもりでお参詣しましょう。

例題

○三祖の御大会をまとめて何というか述べよ。

○御大会は誰が願主となるのか述べよ。

○あなたのお寺で行われる三大会の日程を全て述べよ。

○本山を始め、他寺院へ団体で参詣させていただくことを何というか述べよ。

④宗風

目標

宗風について理解し、宗風を身につけたご信者となれるよう日常信行に励む。

概要

宗風は宗門で制定された宗制で設けられた「本門佛立宗宗綱」の第十三条に十号にわたって規定されたものである。項目を挙げると「善聴・受持・止悪・決定・精進・喜捨・懺悔・日常信行・異体同心・浄仏国土」となる。

宗綱は、国でいえば憲法にも相当する根本規範であり、一言でいえば、「本門佛立宗とは一体どういうものなのか、ということをも最も基本的な点で明文化し、宗内外に宣明したもの」といえる。

この宗綱の第十三条に宗風が示されてあるのだが、宗風は本門佛立宗の実践規範であり、一言でいえば「宗門人が、妙法弘通による浄仏国土顕現という祖願を達成するために遵守すべき、最も根本的かつ重要な信行実践の規準」といえるのである。もっとも、宗風は全く新たに創造されたものではなく、佛立信行の古来からの伝統を明文化したものである。これを分かりやすくいえば世間に家風、校風、社風などがあるように、佛立宗門人には「佛立信者らしさ」があり、「宗門人あるべき姿」がある、それを条文化したのが宗風各号だといえるのである。

宗風に関する御教歌

『あの人は信者でありし人のため 手本となりて名で教化せよ』

ポイント

・高祖日蓮大士は「末法に入て法華経を持つ男女のすがたより外には宝塔なきなり。(乃至)法華経の題目宝塔なり。(乃至)聞信戒定進捨懺の七宝を以てかざりたる宝塔也。」〔阿仏房御書・昭定一一四四頁〕とお示しで、この御妙判をいただかれつつ、開導日扇聖人は「されば聞信戒定進捨懺 聞て 信じて 謗法を払ひて 本尊一服と定めて われも唱へ他にもすゝめて進也 法の為に布施して捨也 罪障消滅これ懺也 此七つを宝としてこの功德も以て一心をかざりかざりて光明を顕わして仏身を感じ得す」〔七つを宝として仏身を感じ得する事・扇全 28 巻 218 頁〕と御指南下されておられる。

この「聞・信・戒・定・進・捨・懺」の七つを古来「七聖財」とも申し、「信心の七宝」ともいうのである。宗風はこの信心の七宝をいただきつつ、これを「善聴・受持・止悪・決定・精進・喜捨・懺悔」の各号として条文化し、この各号を「日常信行」の中で実践し、「異体同心」の実をあげて、「浄仏国土」顕現の祖願達成を目指し、以て自他の現当二世の大願成就を期するものである。

- ・宗風制定の理由を学びましょう。
- ・各項目の意味を学びましょう
- ・

例題

- 宗風の全項目を述べよ。
- 七聖財の全項目を述べよ。
- 宗風は宗制の中のどの部分の何条に示されているか述べよ。